





薇

德田秋聲著

明治
39 1 20
内交

淋しく、悲しく、愁はしかりし妾の一生
の紀念に、此の一輪を我が君にまゐら
す。妾は、まこと狂せるか、あらじ、紅き心の、
色障も知るしめせとて、血薔薇は、御身
の胸にあはれ

ある年ある日

鞠子より

柴垣さま御許に

何草の末がれ草ぞ花一つ 曉臺



血
蓄
薇

徳田秋聲

血蓄薇

(一)

自分が三年振で、男爵柴垣朝之氏の玄關先に車を駐めたのは、秋の空の高く澄透つた、極めて天氣の朗な或朝の事であつた。一體自分と男爵とは、學校時代からい親しい交際で、身分こそ違へ、氣心は實に能く、しつくり合つて居たのである。其故、事情あつて袂を分つてからの三年の月日は、二人の爲には三十年の星霜を経たかの念で、自分が車から降りて、思はず胸を轟せたのも、無理は無いのである。

可憐しい玄關先に前んで、柱の鐸を推すと、旋て現れて來たのが、廿三四歳の東髪的女中である。自分は今も其顔と名とを記憶して居るのであるが、彼女は既に自分を見忘れたのか、慇懃に手を支へて堅苦しい挨拶をした。尤も、自分は田舎生活で失敗をしたので、無下に身寄らしい姿をして居たのは事實である。

「柴垣君お宅？」と低い山高を脱つて狎々しく訊いた。

「はい、在しやいます、貴方は。」

「私は小村貞三。」

「おや、小村さんで在しやいましたか。遂お見それ申しまして。」と愛相笑をして、其まゝ奥へ入つた。

自分は柴垣を驚さうと云ふので、わざと突如に今日訪問したのであるが、近々出京との事は夏以來二度ばかり手紙で知らして置いたのである。自分は待兼ねて、早や靴を脱ぎかけて居ると、女中が再び出て来て、「此方へ」と案内をする。部屋や廊下幾箇所を通つて、自分は二階の西洋式客間へ通された。十二畳許もわらうか、頗る質素な一室で、裝飾とても、一二石膏の肖像や、油絵の額、佛蘭西焼の花瓶に紅紫の秋草が一杯に挿されてある外は、堅固な大い書棚が据えてあるばかり。自分は椅子に倚つて、手帕で顔を拭きながら、寛を取出すと、女中のお松は、マッチ挿と灰皿を前へ据えて、「唯今直にお出に成ますから、少々お待ち下さいまし。」と更に自分の顔を腫めて「悉皆お見それ申しまして。何時お歸りに成つたのでござります。」

「昨夜遅く着いたのです。」

「仙臺に在つたのださうで御座いますね。」

「は、仙臺。」と自分は口髭を捻りながら、「是から又ちよく〜お邪魔に出ます。」

「では、すつと此方に。」

「先當分は。……時に、柴垣君は未だ婚禮はしないのでせうね。」

「は、未だで御座いますよ。ですけれど、お近いうちに遊ばすので御座いませうよ。」

「いづれ然だらうね。取決つたのかね。」

「いゝえ、確な事は存じません。」と、少時語を交へて居るうち、上草履の音がして、旋て入つて來たのは、柴垣男爵其人である。

男爵は、可懐さうにつか〜と寄添つて、突如肩を敲いて微笑んだが、自分の目に映つた彼の相貌は、昔の朝之氏と大した相違はなかつた。が、其の冴々とした目には、一種神經性の鋭い光を持つて居て、眞白い額から、綺麗な眉のあたり、何となく一重の愁の雲を翳して居る。加之、麗しかつた血色も痛く曇んで、豊腴して居た頬の肉さへ、衰に殺けて居る、一體が光彩のある好男子で、絶えず無邪氣な其頬に微笑を添せて居

(四)

たのが、今は妙に陰氣臭い、淋しい氣味を持つて居るのも、氣掛である。

「いや、どうも待つたよ。」と男爵は側近く椅子を取つて、金縁眼鏡の目を睨りつゝ、「何爲速に出て來なかつたね。」

(二)

「いや、實は早く出て來たいのは、萬々であつたが、最初の契約もあつたり、先方は手の無い處で、設んば意に滿たんにしろ、然う勝手も言へんからね。」と自分は辯解らしく言つて「いや、取んた充らん目に逢つたよ。」

「其だから、僕が、仙臺なんか行くのは休せと言つたのだ。否、可恐しい老けたものだ。確に五つは年を取つて居る。仙臺の空氣と、多忙な俗務とが、如何に君の健康を害したかと思遣られる。」

「老けもする筈だ。然し人間は何時も若くて居られはせん。老けたつて驚くに足らんよ。」

「昔の面影は、些とも無いぞ。」

「然ういふ君も餘り變らん方でもないよ。」

「然うだらう。其筈だ、僕は今結婚しやうとして居る人だ。お互に、昔は笑談に戀愛が何したの、ラヴが神聖だの何のと、罪のない事と言つて、喜んで居たものだが、今や結婚は道るべからざる運命となつて來た。實際上の問題と成つて來た。」と柴垣男爵は、言ひつゝ、重い溜息を洩したのであつた。

「實に祝すべき事ではないか。」

「勿論祝すべき事だ。が……。」と男爵は言差して急に推黙つて了つた。

自分には不思議に思つたが、格別其を糺さうともしなかつた。で、仙臺に於ける、某保險會社の問題として、任に赴いてからの自分の歴史を掻擻んで話して、不平たらしくの述懐やら、今度辭任の決心をした原因やら、上京の目的やら、色々辯じた後、再び男爵の結婚談に移らうとして、

「そして君の結婚は。」

「まあ、ゆる／＼話す事にしやうが、嘗て考へて居た事などは、殆ど空想に過ぎない。僕は實に君の來るのを待つて居たのだ。」

(五)

「然云ふやうな意味は君のお手紙にも書いてあつたが、僕には頼と事情が解らなかつた。して、何云ふ事に成つて居るので。」と自分は氣遣しげに聞いた。

「いや、追つて話すが、僕の近頃の境遇には、君も必ず同情を寄せるだらうと思ふ。」と男爵は又急に辯き込んで、「まわ、僕の書齋へ案内しやう。此ぢや落着いて話が出来なう。」

と二人打連立つて男爵の書齋へ入つた。此も西洋室で、次の一室が日本風に出来て居る、只看ると、卓子の上には、古い書束が二三十通餘、ちり／＼に取散かされてゐるが、尙寫眞帖、外國雜誌、美術書、詩や歌の草稿やうのものが、彼處にも此處にも散亂して居て、男爵は今何か紛失物の搜索にでも取か／＼つて居るらしい。

「これは何うしたのだ。自分は怪訝の眉を張つた。

「Sや何でもなう。」

「何ぞ貴重品が紛失したと見えるね。何なら僕も手傳つて共々捜さうか。」

「いや、實は此の手紙を今選出した處だ。僕は君の前には、何の秘密もないので、懇して此處へ通つて貰つた位だが、此の手紙は、都て脱殻だ。」

「脱殻とは。」

「色も香もない、凋んだ花も同然だ。此も一度は實に楽しい思の種であつたのだ。僕は實に幸福であつたのだ。其が何だらう。今ぢや眞箇枯骨死灰も同じ反故に成つて了はうとは。」と男爵は散つた手紙を纏めて、卓子の片隅に置いたが、旋て

「慙云ふものが有るから可けないのだ。」と獨語しながら、衝と椅子を離れて、手捲く牀の上で、件の手紙にマツチを摺つけた。自分が驚いて、「何をやる？」と言ふまもなく、焰がばつと揚つて、手紙は看々燃えて了ふ。

(三)

「何を、君は莫迦な真似をするのだ。」と自分は惘れて言つた。

「はう、莫迦と言はれても爲方がない。然し遺物物が遺つて居ると、何時までも氣に成つて可けない。どうだ、此の燃えること。遺るは灰ばかりだ。」と柴垣男爵は腕と餘燼を賸めて、多時思に沈んで居たが、急に氣を替へて「いや、珍客を待遇すのを忘れて居た。」と卓子の上の鐸を鳴して召使を呼びながら、酒を命じた。良久わつて、麥酒

と菓、二三種の食品が運れたので、二人は相對して久振で杯を取交して互の健康を祝するのであつた。自分は沙を見て、

「然し君が、今の手紙を焚いたに就いては、何ぞ大に事情が有るのだらう。」

「大に有るね。然し那樣話は、まゝ後にして兎に角君と僕とは永久の親友だ。何うか、何時までも恚ありたいものだね。」

「勿論さ。」

「兎角此の友人と云ふ奴は長く交際つてゐるうちには、お互に襖襖が出て可けないものだ。襖襖が出ない迄も、自然に我儘が出て、遂には百年の友情も、仇のやうに成ると云ふのが世間の情態だ。僕も、君は特別として、外に一人非常に崇拜をして居た男があつたと思ひ給へ。どうも其人が何彼に就けて、頼もしくてならない、交れば交るほど慕しくなつて、實に言ふ可からざる情誼を厚くしたのだ。處が一朝或事情のため、悉皆其男の假面が剝れて立ちに其真相が解つて來たのだ。其時は實に後悔をした。」

「其は君の鑑識遠といふものだ。然し君の累にならん以上、決して君の體を傷けるには足らん。」

「然し、人は撰んで交際をすべきものと云ふ事は忘れてはならん。萬望君と僕との間は然云ふ事のないやうに、設ひ君が僕の缺點を發見した場合があらうとも、其が爲に僕を棄て、了ふやうな事のないやうに、呉々も君に希望するのだ。」と男爵は沈んだ調子であつた

「其は僕の方から願ふ處だ。」と自分は言つたが、柴垣の言のうちには、何か秘密な意味が含んで居るのであらうと思つた。男爵は良久あつて、

「して君は何處に宿を取つた。何なら僕の宅へ何だ。」

「難有う。當分昔、眠の舊の下宿に居るのだが、兼旅館だから、なか／＼騒々しい。而も同宿の客に一人不思議な人間が居て、昨夜も散々惱された譯さ。」

「不思議な人間とは、一體何だね。」

「さあ、僕にも何だか解らんが、今朝部屋に坐つてゐる處を見ると、何だか恚う妙な爺さんだ。昨夜は僕も疲れて居るし、九時過に臥床へ入つたのだが、十一時頃に成ると、丁度僕の隣の部屋で、何か頻に高聲を發してゐる、無論酔つて居たに相違ない。濁聲を揚げて唄を歌ふかと思ふと、憂々と板戸を引啓ける、と又ばち／＼手を拍いて女

を呼ぶ。廊下をばたばた駆ける、段階子から落ちこちる。否早や實に厄介な爺だ。聞けば北海道から来た客だと謂ふが、宿でも持餘して居るのさ。」と自分は不圖同宿の異様な客の話を始めたが、男爵は耳を傾けても居なかつた。

「然し那の下宿ぢや、毎も君の噂をして居るよ。此間も前を通つたら、内儀さんが呼留めて、連に君の事を聞いて居た。何故東京にお出にならないのだ、とか言つて、非常に近状を知りたがつて居た。」

「其癖癖待もしないよ。」と、其から又話が書生時代の昔に遡つて、四方に離散した友人の噂で持切つて居たが、思はず時を移して、自分が男爵の邸を出たのは、彼此晩方であつた、自分は男爵の胸に、何か大なる悩みが有るのであらうとは、疾に推察を下したが、倍遂に其秘密を聞ずに了つた。

(四)

自分は富士見町の宿へ歸つて、獨りつくつく思案に沈んで居た。無論自身の身の上の事も有るが、然し大に頭を悩ましたのは、柴垣男爵の昨今が、何か秘密な難問題に苦し

められでもして居るやうに思はれた事で、那程快活で、無邪氣であつた男爵が、慥も沈鬱に、慥も心細くは奈何して成つたのかと、連に其原因が知りたくなつて来る。無論結婚をすると云ふ事は、遂秋の初頃の手紙にも微見してあつた。而して其相手の婦人が春江子と云ふ婦人である事も洩してあつた自分は大に其を祝して、返辭を出して置いたが、其次の彼の手紙には、何か失望たらしくの文句が駢べてあつて、形式的結婚とか、理想と實際の矛盾とか、頗る不愉快な怨嗟の辭であつた。今柴垣の様子を見ると、手紙に違はず、希望のない、樂みの少い結婚を餘儀なくせられたやうな口吻が、特に際立つて聞える。果して其が事實であるとすると、彼は今哀ひべき境遇に立つて居るのである。が、如何に親しい友人と雖も、親密も度には限があるので、自分は果して、其秘密にまで立入つた運動を試み得る権利があるか、否かは疑問である。這座事を考へて、茫然火鉢の前に衰を喫して居ると、猝に階下の方で、内儀さんと話をする高聲が聞えて、旋てばたくと階上へ上つて来る人の足音がある。自分は直に件の不思議な老人であらうと氣が着いた。で、足音は段々近いて、急に自分の部屋の前で停つた。と思ふと、突如障子を啓けて、ぬつと顔を出したのは、果して彼老人で

あつた。短く刈つた其髪は大方白く成つて、鼻頭の赤いのは酒毒であらう、外眦の下つた目は曇然濁つて、悪気のない顔であるが、借決して好い人相とは言へぬ。身装は極めて質朴で、緋の羽織と、時計紐の絡んだ帯だけが絹である。六十近い老人で、右の手に手頃な手提を拵けて居る。彼はさよろく部屋中を陶したが、お終に自分の顔を瞶めて、呵々と笑出した。自分は心の裏で、旋て粗忽の罪を謝して引退るであらうと期して居たが、扱彼は反對に出た。

「は、未だ起きて御座るか。」と太い、寂のある聲で言つた。

「否、今寝支度に掛つてゐる處で。」と自分は冷淡な調子で。

「昨夜お着に成つたか。」と笑顔で聞く。

「は、昨夜。が、何ぞ御用ですか。」

「用？用も有りまするだ。聞けばお前さんは法律が明いつてな。」

「否。」

「陰しなざるな、今朝宿の内儀さんに聞いて皆な知つて居りまするだ。お名前も丁と承はつて置きました。小村真三さん、然だつけな。私は大川岩蔵と云つて、血統

は極めて正しいものぢや。舊は徳川家旗本の一人でな。」

自分は挨拶の爲様もなかつたので、黙つてると、老人は重ねて、

「私はな、今日は此靴のうちに、少し貴重品を持つてをるでな、其で早く歸つた。酔

うては居るが、決して失禮な事は爲ん。御免を蒙つて、此で一服飲して貰はう。」と酔

うて居る所爲でもあらうが、妙な調子で、づかづか入込んで来た。自分は爲うことな

し布團を侷めて、

「何ぞ私に御用ですか。」

「些と其の、折入つてお頼み申したいことがあるでな。」と大川老人は自分と向合つて

坐りながら、大事さうに靴を膝の上に戴せた。

「初見の私に御用とは、して何云ふ事ですか。」

と自分は抑捺ふやうな口調で聞いた。

「外でもないがな、少し秘密の事でな。」と老人は袂から、くしゃくしゃの袋の袋を引出した。

大川老人は落着はらつて其を吸ひながら、

「私はお前さんの正直な處を見込んで、一つお願いがあるのじや。宿のお内儀は大層お前さんを讃めて居る。憐れ見たところ、成程お前さんは正直な人に違はない。其處でな、此事は安受合をせんで、篤と考へて御返辭がして貰ひたい。私は其の、一人法律に明い人の助が得たいのじや。何じや、一つ頼まれては下さらんか。」

「其は不名譽な事でさへなくば、頼まれませう。」

「不名譽？何して〜、お前さんの不名譽に成るやうな事を、何で此の私が頼むものか。唯、此の事件に就いては、私が表へ立現れて働いては、酷く工合の悪いことがあるで、其處は豫じめ含んでおいて貰はなければ成ん。」

「先づ何云ふ性質の事か、其から一つ聞きたいものだが、」

「宜しい。其はお話をするが、聞いた上で、口外するやうな事があつては酷く工合が悪いに依つて、切望口外せんと云ふ事を誓つて貰ひたい。」

「承知しました。決して口外は爲ない。」

「いや、お前さんは立派な紳士じや、決して疑ふ譯ではないが、一應其を確めて置んとな其處でな、此に一人若い男があつたと思ひなさい。其男はな、決して金満家でもなければ、大した地位があるでもない。が、先づ其目々々を面白く暮して居つたのじや。其が一朝非常な災難に會つた次第じや。勿論半分は自分の失錯もあつたらうよ。けれども、其災難は自分が大に信用もし、尊敬もして居つた人のお蔭じやつたと云へば、随分氣毒な話じや。とばかりでは、薩張要領を得ん。だが、其の災難と云ふのが、一ト通や二タ通の災難ではないので、實際の話を聞いたら、成程其は酷いと言ひなざるに相違ない。而も其時其の若い男は、女房を貰つて、漸く五ヶ月と云ふのじや。女房と云ふのは、男よりか身分も好く、氣立も極素直なもので、婚禮をしてからと云ふもの、夫婦なかい誠に睦じかつたのじや、處が不意に其の災難で、少い夫婦は其より二度と會へないと云ふ悲しい運に成つて來たのじや。」と大川老人は目を連睨いて、多時押黙つて居たが、溜息と共に、

「其なりきり、二人は引別れて、お互に音信も出來んやうに成つて了つたのじや。」

其男は住慣れた東京を離れて、遠い處へ遣られたが、幾月目の事であつたか、東京に
獨り残つた女房が死んで了うたと云ふ悲しい報知を聞いたのじや。」

「して、それは餘程以前の事では？」

「先二十年と思へば間違はない。でな、女房は、嘆きのあまり死んだのか、其でも病
氣であつたか、其邊すら亭主には解らんので、又今日までも解らんのじや。何しろ氣
に入つた女房の事ではあり、一時は男も生きて居る瀬もないくらい嘆いたが、借其時
は體が自由でない。處で、其後又風の音信に聞くと、其の亡つた女房が、一人の娘を
遺して行つたと云ふ事で、其が恙なく成長をして居ると云ふのじや。男は私の居つた
北海道に遣られて居つたが、借此場合、お前さんならば何云ふ手段を取りなさるか、
其が聞きたいのぢや。」

「娘が成人してをると云ふなら、無論歸京して其行方を探索する」

「然あらうな。其男も然う思うて、此頃わざわざ東京へ出て来て、娘の行方を詮議し
てをるのじや。」

「成功しましたか。」

「其が未だ、皆暮手係がないのでな、一つお前さんの手で捜して貰ひたいと云ふのじ
や。」

(六)

「其の話は、貴方御自身の事でせう。」と自分は思はず微笑んだ。老人も苦笑をして、

「如何にも私自身の事なのじや。」

「其で、何云ふ手段を取られたか。」

「色々探索もして見ましたが、根つから手係がないのでな。探明社へも頼んで見て
も、一つも要領を得なかつたので。」

「何爲警察へ訴へんのぞ。」

「其は些と都合の悪い事があるでな、萬望一つお前さんの手で……。」

「妙な事件だ。貴下は何爲其を私に頼むです。」と自分は反問した。

「其が何も、何となくお前さんに頼んだ方が可さうに思はれたのじや。と謂ふのが
柴垣といふ華族、其仁とお前さんと心易い云ふ事じや。」

「其を又何して知つて居られる。」と自分は不思議に堪へなかつた。
 「否、其は追々と解つて来やうが、今日お前さんが留守の處、宿のお内儀に行先を聞くともし聞くと、柴垣と云ふ華族さんの宅だらうと云ふ事じや。柴垣と云ふ人は、私も此頃ちらと名を聞いた事がある。此事件に關係があると云ふではないが、萬更前外の人でもなからうかと思つてな。」

「は、柴垣が、何ぞ關係がありませうかな。」と自分は愈々不思議に耐へなかつた。

「其は先お追つての事として、左に右、唯探明社のやうに機械的に働くのでは、心細い。其處で一つ是非お前さんを煩はさうと云ふので。」

「けれど、私とても機械的に働くより外はないので。」

「處で然うでない。柴垣の御友人である以上此事件については、機械的に働いて居られはせん。其の柴垣と云ふ華族さんが、自體大した役に立つのじやが、御本人は勿論何にも御存じはないが、其事は柴垣さんの耳へ入れんやうにな、此は私のお願じや。」

「其點は決して御心配なさるな。」と自分は奇異の念を懷きながら。
 「でな、一人で可けなかつたら、誰でも隨意な人をお遣ひになつて介はん。唯くれく

れも私の名を現さんやうにな、若し又お前さんが功をしなかつたら、私は又別の人を頼む分の事じや。此は私自身の事件のやうぢやが、借後に成つて見ると、柴垣と云ふ其の華族さんが、大層今度の一件を恩に被なされる事に立到るのぢや。従つて、お前さんが又、非常な親切を柴垣さんに盡すことに成るのじや。」

「では、まあ一つ考へて見ませう。」

「其は可けんのだじや。即答をして貰はんと、大に都合が悪い。」

「では少時の御猶豫を。」と自分は腕を拱いて思案に沈んだ。初めて會つた此老人が、其娘の探索を托するに、人もあらうに、自分でなくてはならぬと云ふは極めて不思議である。が、其が柴垣の身上に關してゐると云ふに至つては、更に不思議である。雖然其の單純な物語のうちに、一點惡意を挟んで居る處は見えぬ。其鬨子から推すと、大川老人は究めて正直な人らしい。其處で、右に角引受けて、トンの詰り、其處秘密を開き得るのであらうか、との好奇心もあつたので、自分は直に決心して

「宜しい、頼まれませう。」

「頼まれて下さるか。いや有難い。其處でな。」と老人は満足さうに頷いて、膝の

上に靴を啓けながら、一挺の短銃と共に、大形の革の紙入を傘出して、
「這座飛道具を持つてゐるで、嘸銷魂なさるぢやらうが、此は北海道では、是非用
意の必要があるのぢや。此の爲に、危い命を助かつた事もあるのぞな。」

(七)

老人は紙入の中から一枚の銀行爲替券を引出して、其を自分の前に置いて、

「其ではな、當分此だけお預けをして置きますからな。」

「いや、其はお断をしやう。」と自分が推戻すと、老人は手を掉つて、

「いや、何云ふ又入用な場合がないとも限らん。先お預つた意でお收めを願ひた
So」

「然し這座に餘分の金は。」

「それではな、入用だけお遣ひになると云ふ事にな。不足とあれば、又何時でも私が
差上げますから。必ず遠慮をなすつては可かん。恐う見えても、私は金なら満と貯へ
て居る。何も礼びらを切る譯ぢやないがな。此事件の入費は、幾許か、らうと、那樣

事に頓着するのではない。」

「それじや、さあ一時お預りをして置ませう。私は金の必要は認めんから、落着の
後はそつくりお返をさせよう。」

「其で先話が纏まつたと云ふものじや。否取んだお邪魔をして相済まん。私も酒が悉
皆醒めて了うた、は、と高笑をしながら、部屋を立出でた。

後で自分は熟々今夜の不思議な出来事に思入つて居た。請合ひは請合つたもの、考
へて見ると、這座仕事には経験のない自分である多少希望がないでもないが、借ちよ
つと手を著けかぬる。自分は不圖爲替券に目が着いたので、取掲げて金高を見ると、
驚いた。爲替は正に千圓の額である。

「爺さん何か間違をしたな。」と思つたが、同時に又、彼が幾度も其額面を檢べて居た
事を憶出した。

「何のために這座大金を渡したらう。」と自分は聊か薄氣味悪くもなつたので、そつと
部屋を出で、老人の室を訪れた。今入つたばかりであるのに、もう燈火が薄暗くなつ
てゐる。「大川さん。」と呼んで見たが返辭がない。彼はもう億れて寝入つたのであらう。

爲うことなし、自分は情々部屋に引取つて、旋て十時半の頃臥床に就いた。
翌朝目の覺めたのが九時少し廻つた頃、昨夜の出来事は一切夢のやうで、何だか事實とは受取れぬやうである。自分はそこ／＼に顔を洗つて、着物を着替へて、何とはなし宿を出た。急に柴垣に逢ひたいやうな氣もしたので。案内につれて部屋へ通ると、彼は今丁度起きたところで、一心に手紙を讀んで居たが、自分の顔を見ると、「やあ、莫迦に早いではないか。」

部屋は下の六畳で、日常の好い中庭に臨んで居る。男爵は綺麗に髪を梳つて、黒檀の机に倚りかゝりながら、菓と乳との盆を控へて居る。

「朝つばらからお邪魔をして相済まんね。」

「は、可厭に他人行儀ぢやないか、そして昨夜は熟く睡つたのかね。」

「お蔭で能く睡つたには睡つたが、昨日話した那の老人が、突如僕の部屋へ闖入したには愕した。」

「其奴は無法だね。」と男爵は氣のない調子であつたが「時にね、着かんことを聞くやうだが、死刑の罪人は、前夜善く熟睡をすると云ふ事を聞いて居るが、那は一體何云

ふ作用かね。」

「さあ、と自分は奇問に驚いて「詰り度胸が坐つて了ふのだらう。既う、萬事休すと云ふ場合に立到つて居るのだから、後の事を彼此思はないだらうからね。」

「然すると、漸に結婚する者なんかは、新しい經驗を得やうといふのだから、疑られなすの無理はないね。」

「妙な對照もあつたものだ。」と自分は念はず失笑した。

「處がね、僕此頃其の不眠症に陥つてゐるのだ、昨夜なんかは、全然氣違になるかと思くらぬだ。」

「其は宜しくないね。して其手紙は春江子さんからか。」と自分は聞いた。

(八)

「然だ。」と頷いて、そろ／＼手紙を封筒に收めやうとしたが、其時自分は不圖、昨日焚残したと思はれる四五通の手紙の、りぼんで結へたのが、机の隅に置いてあるのに氣が着いた。

「其手紙も然うか。」と自分は重ねて尋ねた。
「此は違ふ。」と男爵は其裡の一通を取つて、中から手紙を取出し、今捲きかゝつた手紙と並べて、

「能く似た處もあるが、扱違ふ。君は手蹟に依つて、其人の性質を判する事が出来るかね。」

「多少は解るね。」

「其では、此のところを少しづつ讀んで見てくれ給へ。」

自分の二通の手紙を取つて、初め五六行の處を、字を比較して見た。春江子の手蹟は極めて無頓着な、大膽な、何處か硬張つたやうな女學生風の字體であるが、今一つのは、字も小さく、書振も内輪で、字は決して巧いとは謂へぬが、極めて読み易く出来てゐる。即ち一つは亂暴で、生意氣で、一つは優しく柔に出来てゐる。

「さあ、孰が好いね。君もし妻君を擇ぶなら何の方を取るね。」

「莫迦な。何も字と結婚する譯ではあるまい。」と自分は冷笑つた。

「實に然りだ。が、僕は今金と結婚しやうとして居る。」と男爵は自ら嘲むやうに叫んだ。

だ。

「柴垣君、其は何を言ふのだ。」と自分は窘めるやうに言つた。

「否實際だ。僕はもう包まず言明する、君に投出されるか何か、此に親友の信用を賭して自狀する。」

「那樣事を爲るものか。」と自分は熱心に言つた。

「いや。君は終始友誼を渝へないと言ふ……が其は實に君の情の温かい美しい處だが然し事實を知つたら驚くに違はない。君は未だ、一重の幕を隔て、僕を精神を望んで居るに過ぎない。」

「いや、然う僕の君に對する信義を輕蔑して貰ふまい。君は自ら侮ると同時に、友人としての僕の情誼を蹂躪しやうとするのだ。君が設ひ暗黒の側に立たうとも、光明の側に立たうとも、僕は始終君の親友たる事を失はない意だ。」と自分の言辭は少しく劇しくなつた。

「其は僕も君を信せん譯ではない。唯聊か、確めて見たばかりなので、悪く取つては困るよ。」

「どんな試験でも辭さない。僕は神明に誓つて君を棄ては爲ない。」
 「難有い。其では、僕の懺悔の第一章から一つ始めやうが、僕は今、金と結婚すると云ふ事を言つたね。手紙では、其まで白状して丁ふ勇氣はなかつたが、今は包まず言つて丁ふ、此件に就いて、第一心配を掛けるのは母で、酷く氣を揉んで居る。無論春江嬢との結婚に不賛成を唱へる譯ではない。唯、よくお考へなさい、といふに過ぎないのだが。僕は再三再四熟考したのだ。熟考した結果、愈々實行すると言ふことに成つたので、今のところ、何う考へても他に好い手段は有りさうもないのだ。」
 「して、其原因は。」

「僕は御存じの通り、四年前に父に訣れた。譲受けた資産は、僅に華族の體面を保つに足るので、若し僕が伶俐な人間であつたら、決して恠云ふ破滅の場合に至らんのだが、悲しい哉、其處が僕の思慮の浅い處だ。僕は在學中も随分金銭を浪費した方だし卒業後も、何彼と言つては大分の金を費つてゐる。無論、悉く浪費した譯ではない。中には友人を救つた金もあれば、有益の寄附に供した分も鮮くはない。が、母は決して、小言を言つたことはなかつた。處が、此に一つ椿事が出来て來た。」と男爵は冷

めた牛乳に咽喉を潤して食に火を移した。

(九)

柴垣男爵は語を繼いで、「意外の椿事と云ふのは、永年僕の家の内政を預つてゐる剛田と云ふ男が、二三年の間に大な穴を開けたことで、無論自身の私慾のみではない、中には柴垣家の爲に手を出した事業もあれば、又自身僕の方の金を融通して私腹を肥さうとしたが、着々失敗したものである。然し熱かど云ふと、遺方が都て横着で、大分行方の知れなくなつた金もある、當人は別荘を拵へたとか、妾を置くと云ふ話だが、昨今は其勢もないやうなので、若くやつて憚いでゐるのだ。大して悪い人間ではなかつたが、手腕もない癖に、大膽なことを獨斷で行つたのが大失策で、今と成つては先づ不埒な奴と謂ふより他はない。」

其がために、多くもない財産は滅茶苦茶に成つて了つたのだ。或者は大に剛田の責任を問ふべしだと教團いてゐるのだが、責めた處で亡つた金が戻つて來るではなし、訴へた處で内輪の襤褸を世間へ曝す位が落だ。此方の信用してゐたのが所詮手落で、謂

「は、僕が悪いのだ。」

「其は何も、残念だと言ふより外はないね、那樣に又、剛田に全權を委ねてあつたと云ふのが都合ぢやないか。」

「全權を委ねてあつたと云ふ譯ではないが、所詮僕が無経験なものと、財政上の事を輕んじてゐた罪なので。だが、其ばかりなら未しも可い。」が柴垣男爵は急に溜息を吐いて、

「君は無驚く事だらう。惘れて丁ふに相違ない。」

「まあ話し給へ。聞かぬうちは氣遣だ。」と自分は迫つた。

「僕は紳士にあるまじき非行をしたのだ。」

「非行？ 何か其の遊びの方で。」

「僕は花の仲間へ入つたのだ。」

「所謂八八かね。」

「然うなのだ。僕は御存の通り、學校では極めて無垢な坊ぢやんだつた。端艇にラニス、トラムプに球戯ぐらゐが遊戯の重なるもので、花柳の巷へも入らなければ、随分勝

はれもしたけれど、茶屋酒なんと云ふものは、一切背めた事なしたつた。處が一昨年の冬あたりから、色々の人物と交際してゐるうちに悪友が出来て来たね。中には僕を坊ぢやま扱ひにして不好に挑るものもあつたが、到頭花を引くことを覺えたのが、抑々の初發だ。

花は實に面白い。無論今じや札を見るのも可厭になつたが、下手の癖に面白くて堪らない。處が御存知の疑り性だ。一時に熱中して了つて、随分色々な仲間入をした。驚くべきもので、廣い東京には、此の禁令の厳しいなかを、花を商賣にしてゐる輩が鮮くないのだから耐らない。僕は忽ち彼等仲間を取捲れて、何の事はない好い町さ。

無論摺つたね。初發は小さかつたが、段々面白味が付いて来ると、自から大膽になるね。今にして思へば、我身ながら氣が知れないけれど、若々瘡を負つたのは事實だ。百圓も負けると可悔しくて耐らないから、復讐をしようとする。少しは挽回するの勢に乗る。這度は又大く遣られる。自棄に成る。血眼つて来る。さあ迫着かない。業が煮える、瘡に障る實に愚なものだ。愚なものだけれど、何うか想うか金の融通の利くうちは罷められない。實に不思議だ。偽でも誇大でもない。僕は二年半ばかりの間に

四五千を摺つた。けれど、其で罷めて了へば小さいものさ。」と男爵は急に氣が咎めたのか、黙つて自分の顔を見た。

「では未が行つたのか。」

「いや、這度は花じやない、米だ。」

(十)

「實に花の仲間ぐらゐの意地の悪い、悪いものはないので、負ければ、這度お取返しなさい。今日は貴方は向いてゐるから、宜しく齧んでお遣いなさい、なんて煽てる、煽てられるとは知りながら、其處が人間の弱味で、どうも遂乗つて了よ。随分可憐しい譯のものだ。否手短にお話をしやうが、相場に手を出したと云ふのも、花の損失を償ふと云ふ下心があつたので、其も去る者の手引で、初發は手堅く行つてゐたから、少しづつは儲つた、過お調子に乗つて、奮んだのが大怪我の基で、瞬く間に五六百圓と云ふもの消えて亡つて了つた其で手を引いて了へば怪我は小さいのだが、何うも然うは

行かん。お可恥しい話だか、前後合せて三萬ばかり……。」と男爵は急に聲を潜めて、「實に愚な話さね。」と長大息した。

「何とも申し様がないね。」

「僕も業腹だから、寧ろ自棄氣味になつて、途酒も飲めば、入つたことのない遊里へも足を入れる。幾ど半年ばかりと云ふものは、友人の忠告も聞かず、母の心痛も意に介せず、實に亂暴を極めたものだ。さあ、此が僕の意志が弱いからで、到頭血の出るやうな高利の金まで假りると云ふ始末、そして其の結果は愈よ悲惨だ。」

「爲方がないね。」

「財政が紛亂を極めて來た。債権者の或者から信用を失つて、既に法廷へも持出しかねまじき勢ひ。無論家が地所も抵當に入つて居るのだ。僕はもう進退に窮した。僕一箇ならば未だしも爲様もあるが、何しろ氣の毒なのは母で、財政上の心配から僕の墮落を傍觀してゐる心中、僕は實に一ト方ならん厄介を掛けたのだ。いや、今もかけつゝあるのだ。」

「む、弱つたね。」と自分は思はず溜息を吐いた。

「處が此處に不思議な事がある。」
「え、不思議な事？」

「實に不思議な事。と云ふのは、故朝のことだ。僕は其前晩も鬱悶を遣るために酒を仰つたので、朝寝をしてゐると、女が一人の來客があると云ふ取次。名前を聞け、と云ふと、會へば解りますから、と唯然う言つたわけの名刺を出さないと云ふ。はてな、其では誰か債権者でもないものだらう。留守を遣ふと思つて、反つて名を言はんだらうと恚う考へたから、自分は假病を使つた。」

處が、女が復命をすると、這度は、えらい、是非お目にかゝりたい。大層御利益になるお話を持つて來たのだから、左に右會つて下さいと云ふので、爲方がないから應接室へ通さしたと思ひ給へ。」

旋て、びく／＼もので會つて見ると、實に案外だ。其男は、少し秘密のお話があると云ふので先づ、僕の財産が剛田のために蹂躙せられたのが、如何にもお氣毒で堪らんと云ふのが、話の口切だ。僕は實に驚いた。が、彼が心から氣毒がつてゐるのは事實だ。で、段々聞くと、僕の花仲間の一人の友人で、彌張法律家の一人だ、彼は僕の損

害高や、負債の額なんかも大概知つてをる。其處で彼の言ふには、此は自分の利益にしようと思ふのも何でもない、唯貴方が氣毒だから御相談に來たのだが、何うか友人の意で聞いて貰ひたい。で、此に貴方の難關を切脱ける一つの手段がある。其の手段に依れば、貴方は名譽を回復し、債務を果すのみならず、以前に増したる財産家と爲ることが出来る、と恚う言ふのだ僕は幾ど憫れた。
「は、何云ふ筋の話か、早く後を聞かせ給へ。」

(十一)

「で其男の言ふには、と柴垣男爵は話を續けて「此に私の出入をする大財産家の紳士に一人の可愛い娘がある。と恚う切出した時には僕は、愈よ出で、愈よ奇なるに驚いたが、其娘は標致も好し、物も出来るが、惜むらくは、父親が成揚だと云ふのだ。」
「はてね。」と自分は一ト膝乗出した。

「丁度其時話の中途に、女が一封の手紙を持つて來たが、其は僕に宛てた下谷の某高利貸からの手紙で、今明日中に挨拶をしなければ執達吏を向ける意で、今其手筈中だ

と云ふ督促状だ、言つておくが、是は五百圓許の口なのだ。其を見ると、僕の顔は眞蒼に成つた。客は、然こそと云ふ目色で、いや、お氣毒だ其に就けても、是非此娘をお貰ひなさい、娘の父親は、自分は成揚ものだが、娘だけは、萬望一廉の紳士に嫁入をさせて、世間並の交際がさせたい。そして自分も世のなかへ出たいと云ふのが希望で、結婚さへしてくれば金は幾許でも願けると云ふのだ。そして、後後までも財政を整理して、立派に金を作らせて遣ると云ふのだ。」

「妙なものが打突つて来たものだね。」と自分は笑を湛へて、猶も熱心に耳を傾けると柴垣男爵は、更に語を前めて、

「で、僕は其の成揚ものとは、一體何云ふ素姓の人かと聞くと、格別積多の血筋でもなければ、悪事を働いたと云ふ譯でもないたゞ以前は賤しい職業に就いて居たと云ふだけで是と親戚に成つたからと言つて、社會から攻撃を受けるやうな心配は微塵もなす、といふ保證だ。其處で、其姓名を聞くと、娘の名は即ち天田春江子と云ふので。」

「は、春江子さんの由來が、其で始めて解つた。」

「由縁を聞いて見れば、難有くもないが、さつと、まゝ云つたやうな話だ。」

「其で柴垣君、君は何と返事をしたのだ。」

「平生の僕なら、無論一考する迄もなく斷つて了ふのだ、雖然何しろ債権者の包圍攻撃を受けてゐる身の上で、殊に其時は、手劇しい督促状に接してゐる、僕は心が動いたから、熟考の猶豫を興へてくれると云ふ返辭をして一先其男は歸つて了つたが、先方も華族と云ふのに、望を屬して居つたものと見えて、再三説きに来る。無論春江子と云ふのは、萬更知らない女でもなかつたので、一度花仲間の某の宅で、ちよつと顔を合したこともあつたのだ。然し女は決して威服するほどの代物ではないのだ。」

「それで、結果は。」

「僕も色々考へたが、刻下の事情、どうも慫慂云ふ好い話に釣られない譯には行かなかつたので、到底略承諾の旨を答へたと思ひたまへ。が、一方には財政の紊亂、高利貸の暴横、一方には戀愛のない結婚、何方にしても苦痛は同じなので、僕も一時は大に惱んだ、然し、財政の方は實に避くべからざる焦眉の急に迫つてゐる。餘儀なく慫慂決心したので、爲に先づ、債権者の方へは、其旨を言つて、夫々猶豫することに成つた。辛うじて柴垣家の名譽も潰されずに済んだ譯で、世間的の人なら無論此の手段を

取るのだ、僕は御覽の通り世間的の人ではないのだ。其が、此の手段に出たとすれば、僕の困り加減も大概お察しを願ひたいので。さあ、此が僕の災難話の第二章だ君の批判を聞してくれ給へと、柴垣男爵は可憐さうな目を睜つて、自分の顔を見た。

「然う。僕は無論絶對的賛成は出来ないが、然し其場合、何うも爲方がないだらうね。」

(十二)

「無論然うだ。」と柴垣男爵は頷いて「若し慥云ふ手段に依つて、債權者を追償はなかつた日には、今時分僕は君にお目に掛る事も出来なかつたかも知れぬ。」

「それで、君は無論數回春江さんに會つて居るだらうが、今では、多少か君も愛情が温まつて來た譯か。」

「處が、少しも其の望みなしだ。僕は君だから、何も彼も胸中を溢け出してお話をするのだが、僕眞箇彼女に對して、愛情を持たない。」

「では春江さんの心持は。」

「それは君自身に、當人に聞く方が捷徑だ。」と男爵は苦笑をして「いづれ春江は春江で何等か望が有るがらうし、父親も亦自ら意見を持つて居るに相違ない。仲間者の言を聴けば如何にも僕に對して、希望を寄せてゐるやうだが、……無論然うでなければ、あゝ熱心に持込んで來ることもなからうから、少くとも天田老人其人は、僕を買つてゐるのだらうと思ふ。」

「君が、情愛を持つてをらんと云ふ事を、春江さんは承知してゐるか、居ないか、其邊は何うだね。」

「さあ、其も解らんね。人の噂では、戀愛的結婚だなんて言つてゐるさうだが、僕に取つては寧ろ悲惨なお話で、……が、もう決して了つた事だ。色々聞かれると、何せ碌なことでないのだから、何だか可厭な氣がしてならないよ。」

「お察し申すよ。」

「何の道僕は、昂然として社會を濶歩することの出来ない人と、成つて了つたのだ。」

「でも君の手紙に依れば、天田の財産は非常な者だと云ふではないか。」

「眞箇夢想以外だよ。」

「善い人達かね。」

「知らないね。僕は然云ふ詮索をして見たことはない。天田の噂をする者があれば、僕は成る可く聞かないやう〜として居るのだ。」

「ぢや何か世評があるのだね。」

「大凡天田の事を、善く言ふ人間と云ふのは、曾て一人もないのだからね。」

自分は此の話を聞いて、重い溜息を洩した。彼は何の道、不幸の淵に臨んで居るではないか。

「未だお話の第三章と云ふのが有りはせんのかね。」と自分は聞いた。

「正に有るのだよ。然し其は今君に話すまい。追々自然に君の目の前に擴つて來るだらうから。……が、さぞ君は僕に愛相を盡した事だらうね。」

「何爲て、少しも。寧ろお氣毒に思つて、實に何と言ひやうもない位だよ。」

「では、未だ此以上の事があつても、君の友誼は渝らないのか。」

「勿論。いよ〜厚くなるばかりだ。」

「其で僕も安心した。此際君に見棄てられでもして見給へ、僕は實に立つ瀬を失つて

了ふ。」と言ひつゝ、鐸を鳴して女を呼んだ。女が現れた所で、

「少し早目に、お客様と一緒に晝飯を食べるから、其意で用意をして貰ふよ。」

「畏まりました。」と女中が引退つた後で、男爵は、机上の例の手紙の束を取擧げたが又静に下に置いて、

「小村君。昨日僕が焼遺したのは此手紙だ。一緒に焚かうと思つたが、如何なことも、此だけは灰にするに忍びなかつた。」

「それはお楽しみだ。」

「處がお楽しみどころか、此頃は實に、是を見るのが、實に言ふべからざる一種の苦痛だ。が、其も此も僕の智慧が足りないからだ。僕は、君に對して、是を訴へる權利を持たんのだ。」

(十三)

柴垣男爵は、衝と起つて椽端へ出たが、同時に火着に撥んだ件の手紙の束に、マッチを摺つけた、火はばつと燃揚つた、焰の中から、はら〜と散るのは、風に吹るゝ灰

に交る蓄薇の花の餘燼であつた。彼は其一片を掌に載せて、少時曠めて居たが、旋てふつと一吹するかと思ふと、散つて了つた。座に復つた時彼は元氣らしく、

「あゝ、此でさつぱりした。」

「何を小供らしい事をするのだ。」自分は淋しく笑つた。

丁度晝飯の支度が出来たといふので。女中が膳を運んで来たので、柴垣と自分は一杯のビールに咽喉を潤しつゝ、且つ飲み且つ語るのであつた。話の局面が猝に變つて、柴垣男爵は、

「えいと、君の宿に泊つてゐると云ふ例の妙な老人は、相變らず、君の安眠を妨害しは爲ないか。」と聞いた。

「はゝ、何の事かと思つたら、其事か。いや相變らず居るよ。處が昨宵は、のこゝの僕の部屋へ入つて来て、多時話をして行つたよ。」

「うむ、何云を話をしたね。」

「無論自分自身の事さ但し、秘密に願ひたいと云ふ話だつたから、まゝ少時お預としておかう。」

「では一夜のうちに、お昵みになつて了つた譯だね。」

「お昵みもお昵み、僕は老人から緊要な或事件の依頼を受けた始末だ。」

「其は頗る敏速だね。大に儲つて可いね。」

「見た儘老人は非常の金満家らしい。然し餘計辯ると屑が出るから、先此位にして」と自分は又急に話頭を轉じて、

「君は春江さんの家族の寫眞を持つては居ないかね。」

「あゝ、見てくれ給へ。」と床の間から一枚の寫眞を取出して、

「彼女自身に父母、兄弟も姉妹も居る。随分多勢の家族だが、御覽の通り、餘り樂しい家庭とは見えん。」

自分は寫眞を見入りながら「必ずしも然うではないが、併し、僕は自分が金満家になかつたのを怨まざるを得んね。」

「眞箇だ。君が資産家であつたら、僕は此際大に恩を被るのだ。が、小村君、僕一つ決心をした事があるのだよ。」

「何云ふ事かね。」

「春江は、妻であつて見れば、先づ方はないが、爾餘の家族とは餘り親しくしない意だ、即ち妻と、彼等家族の間に、一線の區劃を引いて置く意だ。」

「其が得策だらう。」と自分は氣のない返辭をしながら、猶も寫眞を打成つて居た。人の性質は、必ずしも寫眞に現はれた容貌によつて判せられるものではないが然し寫眞に見える彼等の相貌は、自分をして一種不快の念を起さしめた。就中、春江嬢の二人の兄弟の顔や姿を見ると、自分は如何なる場合にも、彼等と交際するのは恥辱であると感じた。其は極めて陰險な猙獰な顔であるからで、一種陰慘の氣が充満してゐるが、他の人達は必ずしも然うでない。中には品の好い顔もあれば愛嬌のあるものもある。春江嬢に至つては、不思議と鷄群の一種で、大體から謂へば先づ美人の部類である。色は淺黒い方かと思はれるが、心な黒髪、肝然した目、筋の通つた鼻に口も締つて、額の廣いのが聊か氣に爲るばかり。其で愛嬌にも乏しくないのである。一人の姉と人の妹とは、春江嬢には如かぬながらも、とりとくに美點を持つて居る。

(十四)

要するに姉妹は、大體母親から受けた容貌と體質とであると同時に、兄弟の方は先づ父に背て、更に非なるものである。造物主の氣紛も亦太甚しいではない乎。

「何うだね。」と男爵が自分の顔を覗込んだので、

「然うさね。お世辭つ氣のない處、僕は男の兄弟は恐れるが、娘の方は皆出來が可いね。」

「あゝ、幸と、男の方も皆僕を崇拜して居るので、先づ我慢が出來るのさ。此が我慢であつて見給へ、其こそ始末に行けないから。然し、僕は再び言つておくが、彼等家族の全體と縁を結ぶ譯ではなす。」

「然し結婚をした曉は春江さんは君の無情を父母に訴へはせんかね。」

「いや、然云ふ心配はない意だよ。結婚をすれば、既に天田春江子ではなくて、柴垣春江子と化するだらうと思ふのだがね。と云ふのは、春江は一體見築坊だ。自分の地位を高めやう高めやうとして居る。そして世の中へ出やうと焦つてゐる。であるから勢ひ自分の家族を疎んずる。一體僕は商法的、先方も利益的と謂つたやうな、一種の手段としての結婚である以上は、其點には聊かも掛念は無い意だよ。何しろ僕は財政

整理後は、斷乎として超然主義を取る考で、春江も亦必ず其に満足するだらうと、思ふ。が、此問題は是で一先終結としやうね、小村君。」

「もう一つ疑問がある、天田老人の職業は何かね。」
「職業はね、澤山あるよ。株も行つてをれば一二劣な銀行にも關係して居る。又實玉類の賣買なんかも行つて居るやうだ、然し此は、僕直接に突留めた事實ではない、僕は會て何等の立入つた話を聞いたこともないので、従つて少しは間違がないとは、謂へないのだ。」

「然し、那樣に資産があるなら、何爲君なんかと提携する必要があるのだらう。」と自分分は聊か所思があるので、七煩く聞いた。

「其なんぞ、君にも似合ない愚問じやないか。金が必ずしも萬能力を具へて居ないことは先刻御承知の筈ではないか。」

「此は恐入つたね。然し當節は、一概に金だ萬能力でないとは謂へん。」

「然し君は、那樣事を聞いて、何にするのだ。」
「別に目的があつて詮議をする譯ではないのだ。然し、僕も君の親友だ、いつれ天田

家の諸君にもお目に懸らなくちやならない。」

「是非紹介をしやうよ。」

「今日に行かないのか。」

「今日か」と、柴垣男爵は、些と首を捻つたが。

「今日は可けない、何爲ならば、少し信濃町まで行かなくちやならない用事があるから、何うだね、差岡もなかつたら、附合つてくれないか。」

「御希望とならば、お供をしやう。」

「何爲僕が、君に御同伴を願ふかと云ふと、其には一種の必要がある。幾度も言ふとほり僕は君の前には、何事をも打明けて了ふ。其處で、今行かとうする信濃町へ、君が一緒に来てくれれば、僕の所謂衰史の第三章なるものが、否應なしに君の眼前に出現する譯なのだ。」

「は、第三章！それは是非お供を願はうよ。」

「宜しい。では飯を喰つてから出掛けやうよ。」

と男爵はビールを呑干して、そろ／＼飯に取掛つた。自分は其の所謂第三章が待遠

しいので、惶匆に箸を措いて、
 「ぢやね、少し支度もあるから、僕は一足先へ宿へ歸つて待つて居る。
 「わ、可からう。汽車で行くのだから。」

(十五)

自分は柴垣の家を辭して出た。信濃町とは一體甚麼要件であるか、哀史の第三章とは畢竟如何なる事件であるか。自分の好奇心は坐に動くのであつた。
 宿へ歸つて、身支度を爲ながら(身支度と謂つても、唯洋服を着たに過ぎない。)柴垣男爵の來らぬ間を、大川老人の部屋を窺つた。で二三度其名を呼んで見たが、返辭が無かつた。自分は「大川が昨日」柴垣さんは、他日必ず私の恩を感じなされるであらう。貴方が私の爲に盡力して下さるのは、即ち柴垣さんの爲に骨を折つてをると同じで、此の事件を巧く行つて下されば、柴垣さんも同時に浮ぶのだ。」と言ふ意味を自分に語つたのを憶出しながら、「那樣事があらうか。老人の事件に盡力すれば、同時に柴垣を窮境から拯ひ得る？果して然うなのか知ら、柴垣昨今の非運が、果して那樣生易しい

事で挽回し得られるか知ら、と訝つた。然りながら、其言を信せぬながらも、不思議に又「どうか然うあつてくれれば可い」と、一縷の希望を寄せるのであつた。何がなし水に溺れた者が、一筋の藁に縋つて居るやうな心持で。

「貴方大川さんに御用でございませうか。」と、女中が自分の姿を認めて、側へ寄つて來たが「大川さんなら、今日お早くお出かけに成りましたよ。」

「さうか。何ぞ私に用があると云つては居なかつたか。」と自分は昨夜の金の事が氣に成るので、恚う聞いた。

「いゝえ何にも。」と女中は怪訝な顔をして、
 「貴下、大川さんと口を利きなすつたので御座いますか。」

「お利いたよ。なか／＼面白い爺さんだよ。」
 「可厭な小村さん。那麼厄介なお爺さんが、何處か面白いのでござります。」

と言ふうち、早や柴垣が遣つて來た。自分は手袋を穿めながら出迎へると、
 「どうだ、出掛けやうじやないか。」

旋て二人はぼか／＼と行出したが、柴垣は低山高に高い襟、黒い半コートを着て、銀

象眼の柄の着いたステッキ、香水の香をふん／＼爲せながら、娼婦とした背恰好、何

う見ても貴公子の骨柄を具へて居る。

「どうだ、未だ衰少し過ぎたばかりだが、久振でビリヤードでも試みやうか。」と彼は自分を顧みだ。

「御免だ／＼。僕到底當年の勇氣はない。」と其から自分が田舎に於ける生活の語に移つた、牛込のステーションから切符を買つて汽車に乗つたのが、彼此二時の頃であつた。

「今夕は一つ、歸に何處ぞで飲まうじやないか。」と、自分は不圖何かの語に就いて、慥う言つた。

「いや、別荘で行らう。鞠が何か用意をして居るだらうから。」と男爵は念はず口をこらした。

「別荘？」と自分は聴耳を立て、「信濃町に君の別荘は無かつた筈だが。」

「ま、可い。」と柴垣男爵は遮つて、不意と窓の外へ顔を出した。

別荘？別荘とは果して何であらうか。其口吻から察すると、無論昨今出来た別荘では

無いらしい、加之鞠と云ふのも不思議である。召使の名であらうか、其とも料理番の名であらうか。

「柴垣君」と自分が聲をかけたので、爲う事なしに彼は此方へ顔を捻向けたが、

「何だ」と自分の顔を睨めて、「君もし迷惑だつたら、引返してくれ給へ。」

「引返した方が、君の勝手とあらば、僕引返しも爲やうが。」

(十六)

「いや決して然うじやない」と男爵は笑つて「實は君に来て貰ふと、大いに慰められるのだ。二人では逆も道切れない。」

「然うすると、何か病人の見舞にでも行くのか。」いや、其よりか、もつと悪い。實は彼に慰藉を與へて欲しいので。」

「彼とは、所謂鞠と云ふ婦人か。」

「お察しの通りさ。實は、何云ふ風に話を爲たら可からうかと思つて、非常に苦心をして居る所なのだ。僕の懊惱と云ふのは、恐く一ト通でないよ。」

「ひい、して鞠子さんは、吾々を待つて居るのか。」
「僕を待つてゐる。君を同伴すれば、必ず一生懸命で款待する。何だね、来るとも来ないとも。」

「乗出した事だから、左に右に邪魔にならぬ限り、お伴を為やうよ。」

「何か然う願ひたいね。」

汽車の信濃町に着くまで、柴垣は多く口を利かなかつた。一體今の柴垣には、三年前の快活は、夢にも見られぬのであるが、是は又餘りに耐き且つ萎れて居る。

ステーションを出てから、柴垣は辛々口を利いた。

「あ、信濃町は僕の最も楽しく感ずる一種の家であつたが、……然しね小村君、僕切に君に希望するのは、僕が宜しいと言はぬ限り天田の一件は決して口にしてくれ給ふな。」

「言つて悪ければ、無論言やせんよ。」

「春江と結婚一條は、忘れても辯つてくれ給ふな。」

「承知した。」と自分は柴垣の後に跟いて、青山の原を横つて、すつと千駄ヶ谷の方へ

入つた。三四町も奥へ入つたかと思ふと、只有る木立際の衛門を通つて、疎に布いた櫻の落葉を踏みながら前んだ、奥の方に、低い櫓の木の幾株か植つたあたり、枳殻の垣根を結繞らした、一軒の庵めいたる家に、別に一つの門があつて、其處に悄然立つてゐる女の姿が目に入つた。自分の鑑定が、若し大して誤らなければ、芳紀は正に十九、太い銘仙の袷に龜甲の緋、髪を花月巻とか云ふのに爲て、白い薔薇の簪を挿して居る、一見何となく幽なる趣があつて、色の白いのと、眉の優しいのと、目の清しいのと、髪の濃いのが目立つて、體は大きい方である。自分が始終、柴垣に妻を配するならばと、理想にして居た其は正に憇云ふ種類の女であつたので、思はず一驚を吃した、孰かと謂ふと、女學生風であるが、牝鹿のやうな優し味があつて、品格と愛嬌と、双ながら備つて居た。

「何うだ小村君、僕は之を、僕の受ける刑罰の一つだと謂つたのは當つて居るだらう。」と柴垣は自分を顧みたら、鞠子は逸早く聞取つて前み寄りながら、

「刑罰ですつて。」

「いや、此は此方の話だ、追つて又鞠さんにも話すが、」

「然う」と鞠子は微笑んで、「先刻から、お待申して居りましたの。」

「此はね、僕の親友の小村さんと云ふ方だ。」

「然うですか。まあ、善うこそお出下さいました。毎もく、お噂ばかり承はつて居るので御座います、萬望柴垣さん同様に……」と鞠子は懇懇に會釋をした。意つたより人馴れた口の利きやうであるが、然とて決して運葉には聞えぬ。

「始めてお目にかゝります。」と自分は鹿爪らしく挨拶をした。

「さあ、萬望、狭苦しい處ですけれど、お上り下さいました。」と鞠子は二人を先に立たして勇々と跟いて入るのであつたが、柴垣も自分も、此の張のある聲の、愛相らしい調子を聞くに就け、今更に氣後が爲るのであつた。

(十七)

鞠子の様子と聲とを聞けば、直に其の優しい性質と親切な氣立とが解ると同時に、憂き世の風に當らぬ、清淨無垢の日頃の生活が憶遣らるゝのである。

鞠子は二人の躊躇するのを見て、「何うなすつたの。さあ萬望小村さん、貴下からお上

り下さいまし、御迷惑かも知れませんが。」と體に嬌態を作つた。

「何して迷惑どころじや有りませんよ。私は貴下にお目に掛つたのを、非常に榮譽と心得てをるのです。」

「那麼巧い事を有仰つて、おほ。」と鞠子は鈴のやうな聲で笑つたが、

「小村さん、失禮でございますけれど、私徳云ふ不東者でございますから、お教を蒙りまして……貴下は萬望、柴垣さん同様に爲すつて下さいな、私も亦、二人の

柴垣さんとお交際をするやうな氣で居りますから。いゝえお二人は、眞箇一心同體の間柄で在しやるので、御座いますもの。貴下が堅苦しくつて在しやると、柴垣さんも何だか可厭に更つて在つて可けませんわ。」

「さあ、何うしたものでせうか。」と、自分は今彼女の身に落懸らうとしてゐる、一大悲惨の光景を傍觀する勇氣があらうとは、自ら信せられなかつたので、憊う語を洩したのである。

「あれ、那麼事を有仰つて、それじや困りますわ。柴垣さん貴下、何うして、然う調いで在しやるの。そんな事、何でも可いじや有りませんか。お不好でも、小村さんに

不肖をして戴いて、萬望お上り下さいよ。」と柴垣の側に身を寄せながら「折角此まで入らつしやりながら、其では、私が困つて了ひますわ。」

「まあ、可いよ。」と柴垣は淋しく笑つた。

「可かないことよ。ねえ、小村さん、柴垣さんは大分前から、色々心配な事があつて其で滅切瘦せてお了ひなすつたので御座いますよ。今じや大概片が附いたやうですから、貴下お近いうち、何處ぞ氣晴に、旅行にでもお連れ申して下さいましな。ねえ、柴垣さん、旅行を爲さるんでございませう。」

自分は柴垣と目を見合せた、彼女が若し、其の所謂柴垣の旅行と披露をした、内部の事情を知つたなら、果して如何なる感を懐くであらうか。

「だがね鞠さん、」と柴垣は胸が迫つたやうに「僕は好んで旅行をするのぢやないのだよ。」と坐に言つたので、鞠子は怪訝な目を睥つた。

「何爲ていすの。旅行をなさるのが可いんですわ。」

「旅行が、何の好いものか。」と咬いたので、鞠子は愈よ心配さうに、

「柴垣さん、私何ぞ、お氣に觸るやうな事でも申したのなら、御免下さいましよ。」

「は、然うじやない。だが、吾々は咽喉が渴いてゐるのだ。何れ入るから、先づお茶をね。え、可いよ。」

「は、ではね、其處いら庭でも小村さんと御一緒に歩いて入して下さいまし。」と衝と内へ入らうとしたが、急に引返して、庭へ廻るかと思ふと、二輪の白薔薇を持って来て、

「これは柴垣さん、此は小村さん、私の宅のお客様の章に胸に挿して入らつしやい。」と一輪づゝ遞して、はこゝしながら裏へ入らうとしたが、

「全で稚兒だからね。薔薇が又莫迦に所好なので、誰にでも薔薇を持たせなきや承知しないのだ。」と柴垣が言つたので、

「それも貴方が鉢植の薔薇を持って来て下さつてからですわ。小村さん、こんな充らない庭ですけれど、私が骨折つて拵へたんですから、萬望入つてお遊びなすつて下さいまし。」

庭は低い垣根に取繞らされた小庭で、杜松や唐松、木柵などが植つてある。萩はもう迹方もなくなつて、株間に虫の聲が細つて居る。紅い鶏頭のひよる長いのには、辛うじて薄い紅色の花を留めた茉莉の花、青立の一面に黄色いのは、丸で繪具を打瀧けたやうである。一番多いのは花壇の薔薇で、秋草ならぬ節外れのもの、能うも憊う取集めたものと、小村は不思議がつたのである。

「柴垣君！」と小村は垣根の花壇から垣根の外の木立へ脱けた時、不圖柴垣を振顧つた。鞆子は御馳走の支度に裏へ入つたので。

「一體、此は奈何した譯だ。」

「其話を爲やうと思つて、實は此まで引張つて來たのだ、先あ憊云ふ譯さ。」と柴垣はマツチを摺つて實を、喫しながら、咳拂をして、

「憊うと、何から話して可いか、」

「事實を眞率に話したまへ。」

「無論事實を話すのだが、先づ去る片田舎に鄙には稀な一人の優しい少女があつたと思ひ給へ。」

「は、ひどく時代に出るね。」

「谷間に咲ける白百合の、幽なる姿清らかに……」

「解つてゐるよ。那樣拙い新體詩の假辭なんか休して、直に正味を聞きたまへ。」

「處が事實即ち詩なのだ。ではまア、手取早いところ、僕は御存知の我儘だ。君と云ふ友人があつて、始めて大した過もなかつた譯だが、君に田舎へ行かれてからと云ふもの、眞箇制御者を失つた。自分の感情のまゝに行はざるを得なかつた。處が鞆子は東京とは云ふもの、道邊邊鄙に育つた女だから、禮儀作法も知らない、謂はゞ野末に咲いた野菊の一株だ、自然僕のやうな粗暴な男が氣に入る、是が抑々お互の不幸の初發で、僕が貴公子然と澄してゐるが、鞆子が都仕立の氣取つた女なら、憊うは成らなかつたのだ。」

「む、其の發端の冗長な處は、先づ喰つて了ふとして、後をさつさと話し給へ。」

「處が此の何にも知らぬ、清淨無垢の娘に、一人の悪婆が附いて居たのだ。悪婆と謂つて、何も娘を娼妓に賣つて、生血を吸はうと云ふやうな、腹の悪い奴ではないが、所詮は何かしやうと云ふ目論見があつたらしい、中野に茶店を出して居た婆だ。」

「ぢや何かね、其妻が鞠子さんの身の上に就いて、密接の關係がある女かね。」
 「と云ふ譯でもない。母方の遠い親戚の世話に成つてゐるうち不圖其の婆さんが連れて行つて、店番か何かさしておいたので、無論大切にしておいた。可愛がつておいた。」
 「して、鞠子さんの親は。」

「皆な死んで了つたのだ。其面影すら覚えて居ない始末だ。處で僕は能く此附近へ銃獵に來て、遂中野の茶店の婆さんと懇意に成つた。自然娘とも口を利くやうに成つて段々交際つて見ると、非常に伶俐な女だ。其に第一無邪氣で、婆さんが何等か目的がわつて、自分を可愛がるのだと云ふ事も悟つて居ながら格別惡怯れた風も見せない、其時分年は漸く十六で、何となく沈んだ調子の女であつたが僕は何しても、之を素性の賤しい者とは思へなかつた。僕は君も知る通り、一人の妹を亡くしたものだから眞箇戀愛なんて云ふ事を外にして、這麼不幸な娘を、見ると堪らない。母にも話をして時々、簪や紅白粉なんかを贈つた事もある。いや、何も、動もすると、其娘が、妹の再現のやうな氣がしてならなかつた。其が、半年ばかり會はずに、一昨年の秋頃、例の鐵砲を提げて出掛けると。豈圖らんや婆さんは途中で死んだ許の處で、娘が一人瘦細

つてゐる。」

(十九)

「其處で僕が段々様子を聞くと、其婆さんに少い時何ぞ世話に成つた事もあるらしい無論高等小學ぐらゐの處は卒業してゐるので、十四の歳、某華族へ行儀見習に住込んで居るとき、其夫人の氣に入つて、多少音樂の趣味なんかも養ひ、教會なんぞへも屢ば遣されたと云ふ事だ。」

何しろ中野の茶店なんぞに居べき女ではないので、當分身の寄るべき方がないと云ふので以前から僕の家に入つてゐる植木屋の宅に少時預けておくうち、其所有の貸家が軒空いたので、其處に住はす事にした。二三度屋敷へも連れて來た處が、非常に母の氣に入つて、索性さへ賤しくないものなら、少し教育をして、僕の妻にしたいと云ふ希望、其處で去年から學校へも通はせてあるが、索性を詮索すると、深い事は解らないが、先づ母の満足を買ふと云ふ譯には行かないので、結婚談も表向其儘に成つてゐると云ふ始末さ、然し、母は決して反對は爲ないので、一ト通教育が済んだら

引取つても差がないと云ふ意志で、何しろ彼は手頼のない身の上だから、僕を兄とも親とも友人とも頼んでゐる。僕も亦、何云ふものか日に愛情が濃くなるばかりで如何なる事情があらうとも、結婚は爲ると云ふ、堅い約束まで結んでゐる。然し相互の間は極めて潔白で、此際僕が止むを得ん事情で、約束を破るとしても、倫理上決して不都合はないのだ、但約束は、立派に成立つてゐるので、僕も結婚後の幸福な家庭を豫想し、鞠子も亦、近き将来に於て、結婚式が挙げられるものと信じて疑はない。然るに今日の場合脊に腹は替へられぬと云ふ事情から、無断な宣告をしなければならぬ事に成つて来た、鞠子は設し断念し得るとするも、僕は實に耐ふべからざる苦痛を感ずるので、と男爵は辨じて、後を振願つた。鞠子が出て来はせぬかと慮れたので。

「いや、局外から見れば、這度話は極めて同情を寄せ難いものだ。君は或は愚と罵るか知らんが、倂然に行かんのが、人間の弱點だ。鞠子は僕の生活の花でもあり、匂でもあり、光でもあり、性命でもあつたのだ。」

「では、君は結婚の約束をしたのだね。」

「神聖な約束を取交してゐる。」

「而して、今それを破らうと云ふのだね。」と自分は柴垣よりも、寧ろ鞠子の身の立場を憐んだので。

「でも、他に方法がないではないか。僕は今朝から、幾々僕の苦境を説明してゐる事ではないか。一方を見れば倒産、一方を見れば不愉快な結婚、僕は其一を撰ばなければならぬのだ。」

「孰にしても不幸は同じだ。」

「僕と雖も其は十分知つて居る。けれども其間多少の徑庭はある。謂はゞ公私の差別で、僕は寧ろ自家の戀愛は棄てても、柴垣家の名譽は辱しめたくない。いや、少くとも、老いたる母の心を傷めたくはない。加之鞠子と雖も、身に一錢の貯へを持つておらぬ、僕が破産をすれば、彼女は直に路頭に迷はなくちやならない。ねえ、曾に恥辱のみならず、恐るべき貧苦は來つて、吾々を責苛まうとして居るではないか。」

「其は解つた。君の利害問題は十分解つた、然し鞠子さんの苦痛を、君は測つて見たかね。いやさ、誠實に當人痛苦の情を推諒して見たのかね。」

「無論失望もするだらうさ。苦痛も感ずるだらうさ。けれど、僕を一個の放蕩兒、輕

薄男兒として、考へて居てくれれば、其で可いのだ、既での事、取んだものに一生を任す處だつた。未だしも結婚をしなかつたのが幸福だ、ぐらゐに思つてくれれば、其で氣は濟むのだ。」

(二十)

「ぢや、もう言ふまい。」と自分は口を噤んだ。

「言つてくれ給ふな。最早や、自然の運命に任すより外はないのだもの。鞠子とて、一旦は失望もするだらうが、其うちには自から覺つて来る。」と行き出した。

「然しながらね、柴垣君。」と自分は又立停つて、

「若し此事を、春江さんが残らず聞いたら奈何だらう。」

「春江！春江は世間的婦人だもの、何と思ふものか。寧ろ男子は愚劣なものだ、とか思ふ位のものさ。」と鼻頭で冷笑つた。

「む、或は然うかも知れん、然し柴垣君、君は自身の口から、鞠子さんに話をする意か。」

「無論他人から聞いちや、氣拙く感ずるだらうから。が、僕は何分にも弱つた。厭氣が差したとか、先方に罪があるとか云ふものなら至つて事は爲易いが、何しろ僕を信用しきつて居る。何だ、僕の友人だと思つて、君に對して那の氣を遣つてゐること。」

「取んだ愁嘆場さね、お蔭で、僕も大分胸が迫つて來た。」

「相濟まんね。然し、もう入らう。酷く咽喉が渴いて來た。」

「ぢや愈々宣告するのかね。」

「どうも已むを得んね。」

庭へ歸つて來ると、鞠子が丁と椽側に出迎へて居たが、二人の姿を見て、嫣然と笑ひながら、

「大層お話が持てますのね。」

「あ、久振で會つたのだから、色々ね。何ぞ御馳走があるのかね。」

「何かと思つたんでございますけれど、私何を差上げて可いか、解りませんの。水菓子は好不好？」

「結構」。おう、豪しい林檎だね。バナナは有難い。其に葡萄酒か。」

「お餅を取つたんですけれど、可けませんか。」
 「お餅結構。然し吾々は未だ腹が好い。」
 「おや、然うでしたか。栗が宜しければ召食つて下さいよ。晩には栗のお飯を炊きませうね。」

「栗は初ものだ。然し莫迦にこて〜馴れたものだね。」

「は、田舎の事でございませうから、何にも召食るやうな物がなくつて、」と顔とさと紙めた。

見たところ、總てが初で、謂はゞ氣が利いた所はないが、氣立の優しいのは是にも現れて居る。二人の來訪は、彼女に取つては、誠に帝王の降臨より嬉しいので、就中柴垣に對する様子の初々しさは、身をも心をも打委せて何等の疑惧をも抱かぬ體である。此際此少女に向つて別離の宣告を下す。何等の悲惨、何等の無慘、自分の胸には異しき一種の思想が晃いた。其は、凭して楽しく團樂をしてゐる際に、彼女が不意に死んで了つたらば、と云ふ事で、

「あゝ、然うでも爲たら、寧ろ幸福だらう。」と考へた。

が、彼女は一向平氣で、今しも自分の身の上で落かゝらうとする、一大打撃に就いては、頓と無心である。そして、切々と林檎を刺してゐる。

「今日は何と云ふ好い日でせう。」

「好い日？何ぞ好い事があつたのか。」

「可厭ですね、お恍けなつて。私は這麼嬉しいことはありませぬの。小村さん、お望ね這麼田舎ですけれど、散歩がてら又ちよくちよく御一緒に入つて下さいまし。」

「は、有難う。實に好いお住居ですね。然しお一人限ですか。」

「いゝえ、夜に成ると、植木屋の方から、お婆さんが泊りに来てくれますので、すから、些とも淋しくはございませぬ。」

(二十一)

柴垣は始終勝であつたが、氣取られまいと云ふので、妄に葡萄酒を飲んで居た。良久あつて、

「あゝ、葡萄酒も莫迦には出來ないよ。頭がぼくら〜して來た。」

「然う。可けませんね。尤も今日は少し暑うござります。」
 「いや何も堪らん。又林の中でも散歩しやうか。」
 「可からう。僕もお伴をしやう。」
 「ぢや私も参りませう。」
 「それよりか、ぼつ／＼歸る事にしやうか。」
 と柴垣が溜息を洩した。
 「歸つても可いなら歸らう。然し、」と自分は柴垣の目色を窺ふと、「何う切出して可いか、途方に暮れた」と云ふ意味が、歴々と讀まれる。
 「あら、未だ三時半にしか成りませんよ。もつと遊んで在しやいよ。御氣分がお悪なら尙更道が心配ですわ。」と輪子はおど／＼。
 「何有、其程でもないよ。」
 「今日はね、小村さんも入つしやるのですから、御寛りなすつて、夜に成つてからお歸りなさいませよ。甚麼に月が好いか知れやしませんよ。其に虫が、なか／＼好いんですよ。」

「成程虫は好いでせうな。」と自分は無意識に言つた。
 「は、好い段じやございせんよ。私の庭も好うございますけれど、是から町許も参りますと、少し小高い丘がございます、さなんか澤山ございまして、其處から見通しますと四周の景色が、まゝ甚麼に可うございませう月見には、お眺向の場所でございます。」
 「然うですか。」
 「汽車が無くなれば、車も有るのでございますから、是非月を踏んでお歸んなさる事にねえ、然うお爲なさいよ。」
 「いや、然うも爲て居られないよ。色々また用事も有る事だから。」
 「何の御用？」
 「此間も、ちよつと話して置いた旅行の一件もあるし。」
 「ぢや御旅行は、彌張眞實なんですか。私は又、御笑談かと思ひましたら。而して何時頃何處へお立ちなされるので御座います。」
 「さあ、事に依つたら、外國へ行くかも知れない。日は未だ何時とも解らないが、い

づれ餘り寒くならないうちに。」

「へえ然う。外國へ何しに行しやるのでござります。」

「格段の用事も無いが、請り漫遊。」

「何時頃お歸りになるので御座います。」

「其邊は豫じめ解らんね。小村君、まわ三年は要るだらうね。」

「然うね、先づ其位はね。」

「三年ですつて。まわ、大變ぢやございせんか。私は奈何したら可いのでせう。」と鞠子は銷魂で、早や目に涙を持つて居る。

「三年といへば長いやらだが、扱經つてから見れば、實に譯のないものよ。」

「私は毎日々々、指を折つてお待申してをりますわ。でも、甚座に心細いか知れやしませんよ。」と伏目に爲つた。自分はそろ／＼、柴垣が鞠子を、例の緊要な話に釣込まうとするのでわらうと考へたので、衝と起つて、庭へ降立つた。垣根の外へ立出で、内の氣勢を候ひながら、木立の間を歩いて居ると、

「兎角取越苦勞をしない方が可い。」

「でも貴下は、今日は何だか酔いで在しやるやうですわ。何を御心配でもお有んなさるのぢやなくて。」

「じ、然云ふ事は無いよ。」

「私何だか急に心配に成つて來たわ。」

(二十二)

愈々危機が迫つて來たので、自分は胸を轟かせながら、木立の奥深く姿を隠して了つた。折々柴垣の聲は聲えるが、鞠子の聲としては聞えなかつた。或は泣いてゐるのであらうかと自分は其の伏目に成つて、咽入つてゐる圖が目に見えたので、林の縁まで引返して垣根越しに裏の様子を見ると、然うでもない。が、話聲は双方とも沈んで居た良久あつて、柴垣の聲として、

「否、五時には是非歸らなくちやならない。ステーションまで送る？、其にも及ばんよ。」

「何爲お送り申しちや可くないんですか。」

「可けなかないけれど、必要もない。」

「貴下は毎でも那樣邪慳な事ばかりし。」

「處へ、そろ／＼自分立現れた。鞠子は、」

「貴下小村さん、柴垣さんは何時でも剛情で困りますの。一度言出すと、何しても意地を張らなけりや、承知しないの。ですからね、何とも御勝手に為さるが可いんですわ。」

「何だ小村君、ぼつ／＼歸らうか。」

「何も大した御用が有りもしないのに、もうお歸んなさるんですつて。小村さんには誠に済みませんでした。」

「いゝえ、實に面白く遊びました。」

「嗚御迷惑で在しやいましたで御座いませうね。勘忍して下さいよ。」

「何も勘忍する事は有ません。」

「いゝえね、柴垣さんが、僕同様にと有仰つて在しつたものですから、遠お介ひも致しませんで。萬望此にお懲りなく。」

「さあ行かう。」と柴垣は靴を穿いて起上つた、鞠子は暫しと留めて、萎れた二人の善義を胸から、抜取つて、更に新しい花を挿すのであつた。

「萬望ね、今のお話の、お立の日は極りましたらば、知らして下さいね。」

「無論」と柴垣は元氣らしく言つて、ステッキを取上げた。

「私まだ何だかお聞申したい事があるやうな気がして、ならないわ。」と言ひ／＼後に跟いて来る。

「そんな奴があるものか。用事があるなら、後から手紙で言つて寄越すが可い。」門の外で二人は鞠子と袂を別つた。鞠子は悄然立つて後姿を見送つて居たが、二人は旋て路を左に折れた、柴垣と自分とは物をも云はず、早や薄れかゝる西日を真向に浴びながら動もすると木立際に薄蒼い、夕霞の野徑を辿つた。二三町も行いたかと思ふと、柴垣は不圖立停つて、

「小村君！」と自分の顔に目を据ゑた。彼の顔は眞蒼で、目には一種不安の色が浮んで居る。

「何うしたのだ。」

「是非今晚宣告する必要がある。」

「では、君は言出さなかつたのか。」と自分は問返した。

「殘君ながら、其勇氣は無つた。」

「無論然うだらう。局外の僕すら忍びんもの。這麼殘酷な方法を取るよりか、寧ろ發表せん方が可からう。」

「發表しないで奈何する。無論僕の失策だ。僕は永世此の苦痛は脱れない。然し今更僕の罪を論じたところで始まるん話で、僕は到底別離策に出るより外ないよ。死んだ方が寧ろ優だ。」

「死ぬ？」

「破産の不名誉を背負つて、母の心を傷めてより、寧ろ死んだ方が可いね。僕徒に君の同情が買ひたくて、這麼妄言を發する譯ではない。罪の上に罪を作らなくてはならぬのは、實に絶體絶命の場合に立到つて居るからだ。」

「む、其も一應尤ではあるが、」と自分も當惑の眉を顰めながら、「然し柴垣君、黄金は致して得難しとしないが、純粹潔白な愛情は、些とは見着らないよ。」

「眞箇だ。」

「鞠子さんのやうな、純粹な婦人は、僕實に得難からうと思ふ。」

「其は僕も知つて居る。加之僕は、愛のない結婚を爲やうとさへ爲て居るのだ。然しだね、僕の之を斷行しやうと云ふのは、決して私慾じゃないよ。自個を暗黒の地位に擡しても、家名を辱しめたくない、是が僕の希望なので金と結婚するのも、強ち黄金其物に涎を垂して居る譯じゃないのだ。」

「然し、鞠子其人の衷情を察して見れば、又君の家名と何れが重いか、此も考へて見んけりやならん。」

「鞠子は大了た心配はないと思ふ。僕と強いて結婚をして、一生を貧苦の間に過すより、僕が天田から受ける金の幾分を割いてやれば相當の縁にも就かれるだらうし、幸福な一生を送り得られるだらうと思ふ。」

「ぢや、奈何しても可けないのか。」

「折角の御忠告だけれど、何うも致方がないね。其處で、僕自身からは、何うも口を切りにくい。甚だ申兼ねるが、君が一つ、第三者として、宣告をしてくれる譯には行かないだらうか。」

「僕に？」

「君から話をしてくれれば、當人も大いに諱易いだらうと思ふ。」

「とは何爲てだ。」

「詰り、僕が他の婦人と結婚すると云ふ事實を、第三者の君から聞けば、屹度憤慨するに極つてゐる。僕を惡漢と思はしめる手段に外ならぬので、何も僕自身の口から言つたのでは、利目が薄い。君の頭腦には、僕はもう到底親友と云ふ位置を占める權利はないのだ、僕は實に其が残念だが、萬已むを得ない場合だ。小村君、僕と鞠子を救ふと思つて、一つ此任に當つてくれ給へな。」と柴垣男爵は熱心に頼むのであつた。自分は多時思案をして居たが、漸く、

「其は引受けん事はない。」

「難有S!。」

「然し條件があるよ。」

「其麼條件があつても、頓着しない。」

「僕が奈何いふ談じ方をするか、其は暫く天機泄すべからずとして、君は結婚の約束を結んだと言ふね。」

「結んだよ。」

「其を今日まで延引したのは、何ぞ口實でも用ひたのか。」

「つまり、家内に少し紛擾があるといふ。」

「然し、僕が衝に當る段になると、君が目下の事情を、残らず打明けても可いと云ふ君の承諾を得ておく必要がある。」

「勿論さ。君の方寸に一任する。」

「可し、其なら行らう。僕は天田春江と云ふ婦人と結婚すると云ふ事から、大抵結婚の時日、其他是に關する一切の事情は、包まず説明して了ふ意だ。」

「而して、鞠子が大いに憤慨して、僕を罵詈しても、一向構はん。僕は惡徒を以て甘じる。」

「いや、悪徒と成る必要はないが、少しは心持を悪くするだらう。」
 「ぢや立派に漸行してくれ給へ。僕は一ト歩先へ歸つて待つて居るから。」
 「宣しよ。」
 「様子は可成速に聞してくれたまへ。」
 日はもう木立際に没して丁つた。燥き切つた秋の野原の匂が、肌を慄くする夕風に動いて颯が何處かの、森で一啼、四邊は急に閑寂の氣味を添へて来る。

(二十四)

自分は柴垣と袂を分つて、再び鞠子の家を訪れた。五十歳許の、人の善さやうな婆さんが玄關へ立現れたが、自分が名を宣ると、鞠子は奥から飛出して、
 「おや小村さんで御座いますか。奈何なすつたのでございます、何事か起つたのじやございませんか」と氣遣しやうに氣を急ぐ。
 「何事もないのです。唯柴垣君の用事で、些と引返して参つたのです。」と自分は可成落着いて居た。

「柴垣さんの？、まあ、何ぞお怪我でも爲すつたのじや御座いませんですか。ど、どう云ふ事です。」と顔の色を變る。
 「いや、然うじや有りません、御安心なさいまし。自分は愈々落着はらつて、柴垣君の身に異常がある譯ではありません、今頃は汽車に乗つたでせう。」
 「而して貴下は。」
 「それで柴垣君が、是非貴女にお話をせんければならん事があつたのです。其を遂、申あげる機会が無かつたものですから、其で、私が再びお邪魔をするやうな事に成つたのです。」
 「まあ、然やうでございますか。」と、鞠子は怪訝な顔をして、多時自分の顔を覗いて居たが、
 「では萬望お上り下さいますして、」と自分を客間へ請じ入れながら、ラムプの心を挑立てなごして、
 「私何ですか、妙に胸が騒いで可けませんのですよ。柴垣さんにお障がないのなら安心して可いやうなものですけれど、」と漸く坐つて、日記やうの書冊を開きながら、

「今日は誠に嬉しい記念日ですから、どつさり日記帳に附けやうと存じまして貴下の事も書いたんでございますよ。ですけど、此は私より外の方は、誰にも解りませんの、字が拙うございますのに、文が出来ませんから。」

「いや、それは取んだお坊をしましたる。」

「いゝえ、して柴垣さんの事と有仰いますのは、まあ何云ふ事なのでございますか。柴垣さんは、何爲御自身に其を有仰らなかつたのでございませう。」と詰り顔に自分の氣色を候つたが、自分が頼に返辭をしさうもないので「あ、解りました。近いうち旅立を爲さると有仰いました、其事なのでございませう。そして明日お立になるのだけだ、私が何とか言ふだらうと云ふ處から、只近いうちとお茶を濁して在つたのでございませう。」

「いや、然うじや有ません。」

鞠子は目を圓くして自分を眺めたが、自分は思はず俛いて、了つた。

「ぢや彌張、急に何ぞ心配な事が……、いゝえ、有仰られない處を見ると、私は何うも……。」

「いゝえ、今急に何事が起つたと云ふのでもないのです、急の事なら急にお話をするのですよ。」

「では何ぞ重大の事なのでございますか。まあ萬望、一刻も早くお聞せなすつて下さし。」

「お話を爲ませう。が、鞠子さん、貴女は非常な我慢をなさらなければ可かせんよ、大勇氣を要するのです、而して今日晝間伺つた時は、私は徳云ふ大責任を負はせられやうとは、夢にも知らなかつたと云ふ事を、お認め置て下さ。」

「では、柴垣さんが、直接私に話が爲切れなかつたので御座いますか。」

「然うです。」

「小村さん、まあお待ちなすつて下さいまし。私は少し氣を鎮めてから伺ひませう、後生ですから、私が可うございませうと、申しあげますで。」

「あ、承知しました。」

部屋は多時間として居た。時計の刻む音ばかりが、心臓の鼓動と共に、静に互の鼓膜を撃つて居る。十分も経つたと思ふと、鞠子は不意に顔を掻いたが、目には恐怖と、疑念の色、顔は眞蒼であつた。が、鞠子は意ひのほか落着いて、沈んで居た。

「お話を云ふのは甚だ事ですか、私は今獨で色々考へて見ましたのでございませう。」と淋しい薄笑をして、

「乾度柴垣さんのお身の上の事で、私の胸にぎつくりする事なのでございませう。」

「先其邊です。」と自分は故と冷かに言つた。

「乾度柴垣さんに、何ぞ御災難があつて、其の爲めに、今迄のやうに、私の方へも月々の入費を送られないと云ふ事なのでございませう。其ならば、何も然う、私が驚くと云ふほどの事でもございませぬわ。唯、今迄費澤に爲すつて在しつた柴垣さんのことですから、定めし御不自由な事だらうと、私は其がお氣毒でなりませぬわ。私なんか、何でも可いのでございませう。是迄随分不自由を致しておりますから、些とも氣になりや致せんぬの。ですから、私に出来ませぬ事なら、其處事でも致しまして……柴垣さんのお助に成るやうな事でしたら、と鞠子は哀願するやうに、自分

の顔を瞞めて、

「小村さん、那處事なんでございませう。」

「然う。柴垣君が、實は少々失敗をしたのです。無論自分の失策ばかりでもありませぬが。」

「然うでせう。」

「然し金銭上の困難ばかりではないのです。實は其以上、貴女のお身の上に就いて、非常に悲しい事があるのです。」

「非常に悲しい?!」と鞠子は低聲に吐いて、

「まあ、其は甚だ事ではございませぬか、お憤らしなさるのには、小村さん、貴下罪じやございませぬか。」

「では、お聴下さい。私も實はお話が爲難いのです。と謂つてお話を、爲なければ實際がない。」と自分は茶に咽嚥を潤しながら、そくそく話を始めた。可成鞠子を沈めて、静に物柔に、少しづゝ話を進めるのであつたが、鞠子は熱と耳を澄しながら、一言を扱まなかつた。が、折々真白い細い手を舉げて、自分を制止める。其は、話

が餘りに悲しいので遂々中止を哀願するので、暫くすると又、「後を」と催促する
「まあ、さつと憚つた顛末です。」と局を結んだが、鞠子は伏目に成つたさき、はら
はらと熱涙を零すかと思つたと、片手を疊に片手を顔に當て、ぶる／＼と顔を崩せな
がら、泳へず咽泣げた。自分は見るに忍びなかつたので、碌々慰めの言も口から出ず
其儘眼を告げやうとしたが、

「鞠子さん、定めしお力落しでせう。萬望赦して下さい。」

「う、う、え。」

「實は、何か圓滿にと思つて、二人でもつて非常に苦心を致たのです。其結果、最も
好い方法が是なので、此際偏に貴女の御承諾が願ひたいのです。」

「い、え、承諾するも爲ないも、唯御縁がないのと諦めるより外ございせん。」

「此に此紙片に、結婚先の姓名が記してあります。此は、柴垣が決して他の意に出で
たのでないと云ふ、章までに差上げておきます。猶お聞に成りたい事があれば、お尋
ね下さい。今後の事に就いては、孰れ退つて御相談も有りませう。其では、私はお
暇に致しませう、餘り御心配なさらんが可い。」と起上つたが、鞠子は送つて出る空も

なかつた。

(二十六)

汽車を降りたのが、もう九時半の頃で、自分は柴垣に復命する前些と宿へ立寄つた、
宿の内儀さんは、自分の姿を見ると、突如、

「小村さん、貴下のお隣の大川さんね、彼の方は、もうお立に成ましたよ。」

「へえ、大川老人がね。」

「そして貴下にお言傳がございますよ。」

「あ、然う。」

「あのう小村さんに憚う言つてくれろつて。其はね、私(大川)からお聞せ申します、
と憚う云ふことでした。」

「何だ、其限か。」

「はい、此限なのでございますよ。お解りに成つて？」

「妙だな。」と自分は大川から受取つた、千圓の謝金の事を考へて居た。

「解りませんか。私共も妙だと思ひましたけれど、真箇其だけだったのでござい
すよ。」

「何と考へるね。」

「さあ、私共にも解りないのでございますよ、何でも荷物を残らすお持になりまし
て、若し誰ぞ来て、自分のことを聞くものがあつたら、知らない、然う言つてくれ
ると云ふ、お言でございました。」

「そして、誰ぞ老人を尋ねて来た者がありますか。」

「は、ございますよ。而も晩方、大川さんをお訪ねに成つて、居るか有仰いますか
ら、お在にならぬいと申しますと、何時頃居るか云ふお尋で、其も解りませんと申
しましたのでございます。其方はね、痘痕があるので、私は丁と覺えて居ります。」

「は、それは妙だな。」

「然よでございますよ。一體何處へ行つたのですか、貴下御存はないのでございま
すか。」

「些とも知らないね。然し、老人の頼みもあることだから、人が尋ねて来ても、知ら

ないと言つてをる方が可いよ。」

「それは言やしませんとも。然し、あんな風體の悪い人が、煩く、何か詮索がましく
尋ねて参る處を見ますと、何だか變ですね。」

「それは、此方の關したことじやないではないか。」

「其はまあ、然うでございますけれど。一體お客様を悪く申しちや濟みさせんけれど
大川さんは、何となく無氣味な方でございますね。」

「然うか知ら。僕は然うも思はんね。」と此で大川老人の噂は、一先段落を結んで、

「僕は是から、柴垣の宅まで行つて来る。」

「柴垣さんへ、おや、然よでございますか。でも、貴下は今、柴垣さんの處から、
お歸りに成つたのじや御座いませんか。何だか變ですね。」と訶笑をして居た。

自分は何屋へ入つて、新着の手紙もやあると机の上を見たが、何にもないので、再び
外へ出た。柴垣の邸へ着くと、直に其居間へ案内せられた。彼は悶々の情に得堪へな
かつたか、早や寢所に入つて、すつぱり衾を被いで居たが、自分が来たとの報知に、
岸破と跳起きた。

「今歸つたよ。」と自分は懺れきつた體を、控平と座布團の上に投げ出すやうに、坐つた。

「恐縮々々、奈何したね。」

「何も格段報告することもない。君の想像に任さう。然し、案外無事だつたよ。」

「格別僕の事を悪口もしなかつたか。」

「いゝえ唯俛いて泣いてゐる限さ『悲哀』とでも題する彫像を作るなら、差詰りの形が好いね。」

「可し。其で、もう聞かまい。」と柴垣は元氣らしく頭を掉つて、「時に君、明日天田で親父の誕生日を祝ふといふので、招待されてゐるが、何なら一緒に往かう。」

「差支へんか。」

「無論歓迎する、那處のことだから、御馳走は固より吝だらうけれど。」

(二十七)

此際、天田の家庭を觀察しておく必要もあるもので、自分は其翌日、誘はるゝがまゝに

柴垣男爵に同伴した。

天田の家は芝の白金で、三年ぐらゐ以前の造營に係る者であらう。四邊は嚴重な高い板塀を打繞らして、門の側に瓦斯燈が建つてゐる。玄關は門を入つて右へ曲るので、玉川砂利の道の兩側には杜松が植つてゐる、棟はこまこまと幾個にも別れて居るが、門前から透し見ると、玄關側の天水桶のあたり、一株の芭蕉が寸々に裂けて、明竹が半ば枯れかゝつて居る。

打通つて案内せられたのが、十二疊ばかりの部屋で、襖から壁、掛軸に置物、總ての裝飾品には恐らく金目の物も鮮からぬのであるが無趣味の自分の目にも、何となく殺風景で、調和を闕いてゐる。而して、主は唯形の大きいものと、突飛なるものを好むらしいので、此好みから割出された庭の俗臭を帯びてゐるのは勿論で、燈籠や石にも、頗る白痴奢しが多い。一々紹介せられたのを見ると、第一に注目すべきのは春江嬢で、此は先づ普通以上の容色と言つて可からう、唯調子の高慢臭いのが瑕である。若附は先づ無難で、髪物の物からパチンの類に至るまで、派手を旨として、新流行の標本と言ひたけである。一見して見え坊と云ふ事も解るが、調子の浮つたのも、何となく耳

障りである、相手の話を聴くのに、始終「はあ、はあ」と妙に氣取るのが癖である、柴垣の前には、無論相應の作法を守つて居るが、然とて純潔な愛情がわらうとも思はれぬ、柴垣男爵の春江嬢に對する調子は、冷淡でもなく、餘り親切でもない。而して春江嬢は、其で大得意の體である。母親は内氣で、萬事控目なので、格段の非難もないが子息は何れも下凡な人品で、裏長屋住の職工かと思はれる。其話の問題を聞いて居ると、何も一廉の交際家のやうで、著名な當代の人物が然も自分の利己でもゐるかのやうな口吻で、政治、實業、經濟、外交上の問題、市政の是非、都て淺薄陋劣な愚論を入もなげに辯ずるのが、如何にも世間不見のやうに聞える。

主人の天田、此は六十餘の老人で、氷のやうな目に大なる鼻、顔の肉は處々大なる厚い皺を寄せて、皮膚は可恐しく荒い。金の入齒も物凄いが、其窪んだ目で熱と瞋める時、一種の冷い光は、丸で鋼鐵で人を刺すやうである。其の意力の強さと、決断力の速しさとは、差向に口を利いて居ると、直に解るので、敵に對して一歩も假借しないと云ふ處が見える。

「這麼奴の俘に成つては往生だ。」と自分は吐裡で深く柴垣の不幸を悲んだのである。

で、此日の來賓を見れば、天田家の社交も大抵推測られるので、有名な高利貸の某、實業界の某々氏、其に二三の子息の友人、都て三十人弱で、自分は其名を聞いてすら慄然としたのである。

春江子が、得意顔に客の間に周旋するのを見るに就けても、自分は哀れな鞠子の身の上を憶出さずには居られなかつた。柴垣の折々鬱いで居るのも其で、吾等二人に取つて、大凡此日の變應ぐらゐる不愉快なのは無つた。

「わ、此が若し鞠子嬢であつたら！」と自分は幾度も、溜息を呟いた。

(二十八)

柴垣男爵は、此日は朝から氣分が悪いと謂つて居たが、胸中の悶々を遣るために、強ひて多量の酒を飲んだ所爲でもあらうか、宴闌なる頃、急に顔を眞蒼にして、別室へ退いた、自分は驚いて、様子を見に行くと、彼は絶か嘔吐の後を、呻いて寢て居るのであつた。天田家では、直に醫師を呼んで、應急の手當に及んだが、氣遣ほどの事でもないと言ふので、靜に慰はせて置くのであつた。

宴の散じた時、天田が、柴垣は此儘にと云ふので、自分は一人車を驅つて、男爵の母親へ一應此旨を報せやうと考へた、男爵の母君は、其名を由嘉子と言つて、平生多病な質であつたのに、父男爵が歿後二三年は、幾んど健康な日とは無いからのであつたので、始終大磯あたりの閑地で、静養に力めて居つた。家扶の剛田が、財産を蹂躪したのも、一つは此等の處に附込んだので、自分が柴垣男爵と恣程懇意な、間でもりながら、遂母君と親しく話を爲たことのないのも、亦此が爲であつた。自分が男爵家の玄關に車を下したのは、灯が點されてから餘程経つてからである。で、母君に面會を請ふと、早速奥の小さい一室に通された、由嘉子は五十四五歳の年輩、而長の、弱しい體つきで、目と云ひ鼻と云ひ、男爵の母であるとは、誰にも一見して解る。挨拶が濟んだところで、彼女は速と自分の友誼の厚いのを謝して、尙此後も、如何なる事があらうとも、不幸な朝之のために、後見をしてくれるやうにとの、至つた口誼である、自分は今日の男爵の不幸を述べて、

「然し、お手當は十分爲てありますから、御心配には及びません。唯、或はお歸か晚くなるかも知れませんから、些とお知らせに參つたのです。」

「それは、まあ、御親切に。」と由嘉子は手づから茶を淹れなどして、今日は何だか氣が進まない、然う申して居つたのでございませぬ、他も此頃は色々心配がございまして、自分の失敗もございませぬけれど何だか可哀さうでございませぬ。然う申せば、昨日は取んだ御心配で、

「何致しまして。私も不本意ではありましたが、何分御決心の事でも有ますから。」

「はい。致方も御座いませぬ。貴方は、三年振で、朝之にお會ひなすつたのださうで御座いますか、何と變つて居る事でございませうね。」

「然様でも有りませぬな。」

「今日あたり、何でございませぬ、春江の調子は。」

「然やう。氣の面自さうな方じやありませんか。」

「ですけれど、朝之に對する調子は、何も心から愛情が有らうとは受取れませぬ。纏致は成程申分はございませぬ。財産も有ります。雖然小村さん、若い者同士婚約を致しまして夫婦の間に愛情のないくらゐ、惨なもの御座いませぬよ。私なんぞは、既う時勢後でございませぬ、此節の世の中は奈何成つてをりますか、一向存じも致し

「御尤でございます。」

「然し、此は貴下の所爲じやないので御座いますから、唯自分の腑効ないのを忍びより外でございます。小村さん、貴下は能く他の爲に盡して下さいます。朝之の兄とも思つてをるので御座いますから、天田と縁を結んだ後も、何卒相變らず、仲善くして與つて下さいまし。」

「其は、私から願ふところで御座います。」

(二十九)

由嘉子は潤ふた目を、連睡しながら、

「深い事も聞きませんでしたでしたが、然して鞠子は得心いたしましたか。」

「然やう。得心をするにも、爲ないにも、何も爲方がないと諦めたのでございませうな。眞箇氣毒でした。」

「鞠子とても、身柄は好いと云ふ譯でもございせんが、何しろ那した氣立の優しい

女でございます。春江から見れば、其歴に好いか知れや爲ません。私は他を引取つて、十分嫉を致して、仕立て、遣りませうと思つて居りましたのに、今となつては、先方も氣毒、此方も所思外れ、實に殘念な事を致しました。」

「いや、お察し申して居ります然し、春江さんとても、貴女が十分嫉けてお上げなすつたら、旋て立派な夫人に成られるでせう。親が悪いからと謂つて、其子が必ずしも親に似る譯でもありません。」

「いゝえ、春江が格別に悪いと云ふのぢやございせんけれど、心持と云ふものは、致方のない者でございまして、何も蟲が好かないので御座います、朝之に聞きますと、然うでもないののでございませうか、格別不足もないやうでございませうが、其が又、私への氣休かと存じますと、一層不憫でならないのでございませう。」

「如何にも。私も孰かと申せば、今度の御縁組に就いては、大に不満足なのでございませう、其と同時に自身の金方のないのを憐んでをりますので、慇懃でないのなら他に策も有さうなものと、實は及ばすながら、色々氣を揉んでをるので御座います。」

「まわ何と云ふ御親切な！其につけましても剛田の仕打が憎くてならないので御座い

ますけれど、今更責めて見た處で、亡つた金が出て来るではなし、憊う一度に運が傾いて来るものかと。もう残念でならないので御座います。」と嘉由子は染々訴へるのであつた、自分は慰藉の術も知らぬのであつたが、又今更のやうに、柴垣家の不幸が帯はれる。

「然し、天田は成程感服した人物じやありませんけれど、御薫陶のお爲方によつては、春江さんは十分感化出来るのですから、一方財政の整理を爲さると同時に、一方家庭の親睦をお圖りにならなければ成りません。朝之君も一つの経験を積んだ譯ですから今後は大に考を凝されるでせう。」

「どうか、然うなつてくれれば可うございますが、向不見の他の事でございませうから兎角行末が案じられましたね。」と重い溜息を吐いたが、急に氣を變へて、

「取らだ愚痴話で費下さぞ、お煩いでございませう。朝之が又、此の私にさへ打明けない事でも、貴下には腹藏なくお話を致しまして、御意見を御聞き申すのだと申しまして、其は可恐い御信用致して居るものでございませうから、私までが遠、お可憐いやうな氣が致しまして。」

「萬望此後も、御別懇にお願ひしたいものです、而して私で宜しいやうなことでしたら何でも有仰つて下さい。」

「難有うございませう。」

「唯此際、御結婚は可成お延しに成つた方が可からうかと思ふです。其迄に、妙策が浮ぶと云ふ譯でもありませんが、然し、輕卒と云ふことは、如何なる場合にも後悔の多いものです。」

「眞箇でござりますよ。」と其から二十分ばかり話を交へて、自分は男爵家を辭して出たが、思へば老母の身の上も悲惨であつた。

(三十)

自分は此に、彼の奇しき老人から一千圓の大金を預かつてゐる事を忘れてはならぬ。二十年弱の星霜を経て、最愛の妻が忘れ遺身の一人の娘の行方の探索、其を引受けたのも妙であるが、之を自分に託した老人の意志が抑も謎である、其夜も老人から、何等の音信を得なかつた。但し宿の内儀さんの報告に依ると、件の痕痕の男は、其日も

其夜も、前後二三回、大川老人の詮索に來たとの事である。大川老人が、不意に宿を引拂つて、行先を明さないのが既に一つの不思議であるのに、今また此の異様の男が數回の訪問、事いよく不思議である。

自分は千圓の金に就いて、老人は必ず魚忽を詫びに來るであらうと、思う信じてゐたのであるが、借何等の沙汰もないので、左に右娘の所在探索に取かゝらうと決心した、爰に斷つておくが、自分は會て法律こそ修めたが、而して辯護士の免狀こそ持つては居るが、探偵なるものに就いては、皆目無經驗なので、死して雲を掴むやうな此事件に就いては、最初から何等の見込があつて引受けた譯ではない。

自分は百方思案をした結果、到頭一個の妙案を思浮べた。其は、自分には到底探偵の能力はないのであるから、他を頼むより外はないと云ふので、一人の舊知己に相談を持ち込む事に決した、目下の處、依頼主の行方も不明であるので、無論思斷つて手は下せぬが、準備だけは爲しておく必要があると信じたので。

で、自分は今、差して行く其舊友の身の上に着いて、爰に掻摘んだ話をして置かう、名は小名村彦衛と云つて、最初刑事を勤めて居つたのが、會て強盜を捕へやうとして

過つてピストルで射撃せられたのが基となつて、左足を切斷したので、餘儀なく職を辭して、其後は細々と恩給で生活をしてゐたのであるが、自分と昵近に成つたのは、其前後の事で、家事向に就いて聊か盡力したのを、酷く恩に被てゐる。間もなく彼は私探社と云ふ一社を組織して、其名の示す如く、一私人の探偵信頼に應じてゐたが、實際も自分は應分の力を假したものである。小名村と其妻君は、此等の事から、自分に對して分外の敬意を献げてゐる。

幸にして私探社の繁榮の運に向いて來た。彼は警察に奉職の時分から、探偵の機敏を以て稱せられて居つたが、私探社を経営してからと云ふもの、八方から依頼を受け、種々の探索に従事するので、東京十五區は社會の表面と裏面とを問はず、彼の面前には、一個の照魔鏡に寫し出さるゝが如く明かである、要するに彼は鑒定に長けてゐるので、一たび其見込に依つて手を入れれば、如何なる秘密と雖も容易に、其真相を暴露して丁ふのである。

木挽町の其家を訪ねると、丁度二人の子供が前に遊んで居た。三年會はないので、見覺えては居まいと思ひの外、今年十歳に成る兄の子は、自分の顔を見ると、突如駭込

んで、自分の來訪を告げた。同時に自分は格子戸の内へ入つたが、裏は相變らず難を極めたもので、陰氣なものと汚いので誰でも些と辟易する、妻君は臺所の方から駈出して來たが禰を外しく、鎖魂たやうな顔をして、出齒の頸を突出しながら、自分を贖めた。目が細いのに口が大いので、些と口で人を見るやうにも思はれる。

(三十一)

「おや小村さん、何時お歸に成つたのでございます。」と小名村の細君は、「萬望まわ、お上り遊して。」

「此頃舞戻つて來ましてな、小名村君はお宅ですか。」と上らうとすると、奥からひよつこり主人が出て來た。

探偵と云ふと、些と不快に聞える。惡酷い目容の、無氣味な男のやうに思はれるのであるが、小名村は決して人相の悪い男ではなかつた。眼は無論、終始敏活に働いて居る。口數も利かぬ方である。頭は少し禿げて、瘦ぎすな色の結黒い薄痘痕の男であるが、大い口元には始終愛嬌を持つて居て、腰の低い、叮嚀な男である。八疊ばかりの

客間へ通して、慇懃に會釋をしたが、細君も子供も皆周へ集つて來た。

「仙臺の方は如何でございましたか。」

「む、格別何と云ふ事も無いが、少し重役と衝突した事があつて、引留める人もあつたが、不意と廢す事に成つたので。君は相變らず事件があるかね。」

「お陰と、毎も引受け切れん位でして、お見込どほり繁昌して居ります。」

「では些とは工面が好くなつたらう。」

「其點は依然昔の小名村でして、自慢じやございませませんが、年が年中びい〜して居ります。」

「は、君のやうな明敏な頭を持つてゐて、其で終始財政の始末が出來ぬと云ふのは奈何いふものだらう。」

「私の體には、非常な吸収力が御座いますから。」

「吸収力？」

「大酒を飲みますから、其で年中貧乏をして居ります。」

「は、然しね、今日は少し相談に來たのだ。直に一つ、着手して貰ひたい事件があ

るのだ。」

「事件、宜しうございます。」

「實は人から頼まれたので、彌張搜索事件だが、」

「それは是非行して頂きます。貴下は決して御心配なざらんが可うでございます。」

「私には一體難しいので、引受けると云ふのが間違つて居るのだが、君が行つてくれれば譯はなし。」

「其の依頼主は彌張東京でございますな。」

「東京だが、偶然附近になつて、不圖頼まれたので、」

「宜しうございます。引受けました。貴下お宿は富士見町で？」

「善く知つてゐるな。」と自分は目を丸くした

「いや、其位の事は解ります。不圖然云ふ事を聞込んだもので御座いますから、實は

一兩日中、お訪ねをしやうと思つて居つた位なのでして、」

「何して然云ふ事が解る？」

「いや、遂此間お宿に就いて、少し搜索の筋があつたものでござりますからな。」と小

名村は薄笑をして居る。

自分は確と膝を打つた。と云ふのは、宿の内儀の話に、奇しげな男が、大川老人を尋ねて來たと云ふので、而も其男は痘痕があつたと謂つた事がある。

「では君が何か、大川岩藏なるものを搜索してをるのか。」

「其の大川岩藏です、無論此は直接人から依頼を受けた譯ではないので御座います。其筋の嚴探中の者を、好奇に私が横合から手を廻して居るので御座います。首尾よく成功しても、表向私の功績に成る譯ではございません。」

「して何云ふ必要があつて、大川を搜索するのだ。」

「いや、大に其必要があるのでございます。近頃でない面白い事件なのでござります。」

(三十二)

「其を一つ聞かうではないか。」と自分は事の奇なるに驚いたのである。

「然し何ぞお差障があつては、甚だ恐入りますので、」

「實は私も、其の大川岩藏なる者に就いては私に不思議を抱いてゐるので、何者だか
と云ふ事は、一つ十分知っておきたい。今日来た用事と云ふのも、多少大川に關した事
なので。」

「然うですか。其じやまあ、忌憚なくお話しが出来ると云ふものでございますが、
然し今の貴下の御用と有仰るのは、大川からの依託をお受けなすつたので。」

「先づ然うだ。然し、遂此二三日先、始めて口を利いたばかりの男で、其後顔と合は
ないのだ。」

「其の始めてお會ひに成つたと云ふのは、御上京後間もない事で、……いや、丁と
事實が擧つて居るので。それで、先週の日曜日に貴下が夜遅く、彼此十一時頃上野か
らお着になつた時分には、大川と云ふ男は、丁度宿には居なかつた。處が其晩は一時
過頃に成つて漸く歸つて來たのです。」

「實に詳しいものだ。」

「貴下とお昵近になつたのは、貴下からお求めなすつたのか、其とも大川からでござ
りましたか。」

「其は無論大川から接近して來たので。」

「事は偶然のやうじや御座いますが、見ず識らずの貴下に、唯同宿に居ると云ふ因縁
で、何か御依頼をしたと云ふのは、此際貴下を捜して居つたのに相違ない。」

「む、然う言へば、多少然云ふやうな意味を洩して居つたよ。」

「實は私も、大川が貴下の事を口にして居たのを聞いて居りますので。」

「む、此は愈よ妙だ。然うすと、大川へ私の事を讀めて言つたのは、君であつたの
か。」

「實は然うなんでございます、其で、私で宜しければ、何時でも取かゝりますが、
「無論君でなくてはならんが、して何云ふ風に相談をしたものだらう。」

「貴下の事でございませうから、別に報酬を戴きやしません。十分御盡力申します。」

「いや、禮をするのは、私ではないので、所詮大川が君に支辨する勘定なのだか
ら、決して遠慮するには當りない、實を云ふと、大川から莫大な金額を受取つてゐる
ので、従つて費用は幾許か、つても更に頓着しない。」

「其は、まあ後のお話としまして、一體其依頼をお受けなすつた事件と云ふのは、何

云ふ性質のものでございませぬ。」
 此で自分は即答は出来なかつた。何為ならば自分は小名村と想して互に相信用して話をして居る、同じく、大川とも互に相信用して話をしたのである。小名村は無論信用すべき人間であるが、大川の自分に對する信用も亦無にしてはならぬ、即ち、大川老人が自分へ打明けた此の事件は、輕々しく自分から他へ洩してはならぬのである。然りながら、大川老人の言に依れば、彼は既に一たび然る一人の探偵へ依頼したと云ふのである。而も其の探偵は何等の功をも奏しなかつたと云ふのであつた。所謂探偵とは小名村の事ではあるまいか。小名村に依頼は爲たが、功がなかつたので、更に自分に依頼したとすれば、自分から再び小名村へ依頼するのは、頗る迂遠のやうではあるが、自分の信するところでは、此の探索は、先づ小名村を措いて他に求むべき人は無いのである。小名村が此探偵を爲せなかつたと云ふのは、寧ろ不思議である。して見ると、迂かり小名村に依頼するのも悪いが、又依頼せずにも置かれぬ。

(三十三)

其處で自分は「然し先づ君に聞きたいのは、大川なるものは、既に一たび君に何を依頼した事は有りませぬか。」
 「正に依頼されたのでございませぬ。然し、其後報酬を受取つて、關係を断つて了つたのでございませぬ。」
 「む、其では、私は大川老人から委任された権利をもつて、新に私から君に依頼しやう。で、大川老人は多年遠國に放浪したるたのは、君も定めし聞いたであらう。」
 「然やう〜。」と小名村は急に熱心になる。
 「東京を去る少し前に結婚をした、其妻を東京に残して行つた。處が其後、不幸にして其妻は病死したと云ふことを聞いたのだ。けれど、其妻が一人の娘を後に遺して行つたと云ふ事は、近頃始めて知つたので、其を聞くと、直に娘を捜す目的で東京へ遣つて來たのだ。所詮私が依頼を受けたのは、其娘の探索一件なので。」
 「へえ！」
 「君は驚いてるのか。して、君の依頼を受けたと云ふのは、其事ではないのか。」
 「違ひませぬ。全く別問題でございませぬ。お話を聞いて全く驚きましたので。」

「其は意外だね。」と、自分も一驚を吃したのである。
「貴下の前だから、私は正直に申すのでございしますが、唯今まで、大川に娘があらうなど、は夢にも知りませんでした。いや、不思議な事があれば有るもので。」

「では、君の事件と云ふのは。」

「さあ、其でござります。何したら宜しいか些と迷ふのでござります。然し私の考もござりますので、此に一つ妙な事をお話ししなければならぬのでござります。此お話を申しあげると、貴下は必ず些と不思議にお考へなさる。其が何の關係があるかと有仰るに相違なす。」

「はてね。」と自分はト膝前めた。

「私の考が正當か不正當か、其は解りません、然し其と之と關係があるか、無いか、些と不思議がるだけの価値はござりますので、其處で貴下は、大川が急に宿を引拂つたことは御存で在る。何故引拂つたかと云ふ事を御存でござりますか。」

「其は、殆ど私の考に及ばんが、何でも長く那の宿に居る氣であつたのは、事實らしう。」

「處が、荷物を残らず提げて引越したではございせんか。」

「然云ふ話だね。」

「何處へ行つたか、御存でござりますか。」

「知らないね。」

「何ぞ音信がありましたか。」

「何ぞ報知をすると云ふ言置はあつたが、借向に沙汰がないね。」

「然うでせう、處が私の方では、一昨々日、白金の天田の家で、何か祝宴があつたと云ふ事を確めてをるのでござります。」

「いや、實に驚くべき機敏なものだね。全で鬼神のやうだ。」

「お驚きなさらなくちやならないのです。然し何か此の事件が、巧く一點に歸着して来るらしいのでござります。歸着したらば、一入のお慰みでござります。」

「愈よ驚くね。」

「天田の祝宴には柴垣男爵もお出になりました。貴方も御出になりました。一體天田の春江さんと云ふのが、男爵の未來の令夫人で。」

「速く要點を話し給へ。驚きの拍子が脱けて了ふ。」
「それで貴下は、今日の新聞を御覽なさいましたか。」

(三十四)

「いや、未だ見なす。」

「では、其後柴垣さんにはお會ひに成りましたか。」

「一兩日會はない。」

「天田さんには。」

「會ひはしない。」

「それぢや、何にも御存じないと見える。先づ此をお讀みなすつて御覽なさい。」と小名村は一枚の新聞の三面を開いて自分に示した。

新聞を取つて讀むと、下の如き雑報がある。

一昨々夜芝白金天田金兵衛氏方へ不思議の盜賊押入りたり。其日は天田氏方にて祝宴あり、六七人の親戚知友を招きて饗應を爲し、客の全く散じたるは夜の九時頃な

りしが大分混雑の中とて、誰一人盜賊の押入りしを知らざりし。金兵衛氏夫妻及び令息令嬢は席上にありて、其々客の歡待に心を盡し居り、臺所には二人の女中と當日手傳に來り居りし女とが勝手元を働さをりて、玄關口は全く空虚と成りをりし隙を窺ひて忍び入りたるものならんか、去るにても勝手に近き玄關より、奥の居間へと忍入りまんと、盗品を持出すまで、何の氣も着かざりしとは頗る怪しむべし。或は後庭の方より、垣を乗越して、直に居間に忍び入りしものならんかとの推測もあれど、何にしても平生能く同邸の勝手を心得居るものならん。盜賊は一人か二人か、其も疑問なるが盗品は一箇の櫃なり。此櫃に收ひありしは大したる直打の物はあらずして、櫃ぐるみ持出しても二人の力にて餘る程なるが、同居間には尙之より遙に大切なる寶石類の櫃ありて、錠をも卸さず、居間の手近に据えありしを、其には目も掛けずして、輕き方を持出したるは疑問の種なり。其筋にては盜賊は何れも持去りたりとて何の役にも立たざる物のみなれば、旋て見込違なりしを覺るべしと雖も、今其目録を作るべき記憶なきを遺憾とす云々、但盜品は重に書類ならん

との事にて、被害者たる金兵衛氏は反つて盗賊の愚を嗤ひをれど、此には何等か事情あることならんと、其筋にて嚴探中なり。

「何も然う奇しいことでもないやうでないか、普通の盗賊だらうじやないか。」と、自分
は新聞を下に置きながら、「これが何して君には不思議かね。」

「不思議じやありませんか。私は其に就いて大に考があるのです。」と、
小名村は苦笑をして居る。

「其の考を聞かうではないか。」

「大に説がございます。先づ百のうち九十九まで、惣云ふ場合の盗賊には、少くとも
一つの目的があつて、遣つた仕事でなくちやならないのでございます。其は貴下もお
解りでございます。」

「何でもない事さ。目的なしに物を盗む莫迦もあるまい。有價物品を偷んで、金に代
へやうと云ふ……知れきつた話じやないか。」

「如何にも其に違ひございません。處で、天田の奥の間へ首尾よく忍んだ此盗賊は、戦
場の地理に明かであつたと云ふ事も明かでございます。又祝宴の處に附込んだのです

から、時間も十分……と云ふ譯ぢやないが、先十分落着いて行つた仕事であると云ふ
事も確です、其であるのに、唯一つの概を目がけたと云ふのは可笑しいじやございま
せんか。」

「む、其は可笑し。」

(三十五)

小名村は益々熱心に爲つて、「然も其居間には自由の中を引出す事の出来る櫃が他に有
つたと云ふではありませんか。一體盗賊の癖として、箆筒から箆筒、靴から靴、有つ
たけのものを啓けて見るのが普通でございます。然るに、彼の物へは目も掛けぬ、こ
れが抑も他に意志のあつて爲た仕事であると云ふ證據でございます。果して然うでな
いとすれば、餘程間拔な賊と謂はなければなりません。え、何です。」

「先づ御説の通りかね。」

「假に貴方が、此場合の盗賊であるとした處で、折角寶の山に入りながら、何にも取
らずに出ると云ふ法は有りますまい。此理窟から推して行くと、何しても他に深

重なる意味があつたに相違ないのでございます。此位の事は、普通一般の常識を持つた人なら、直に見當の着く事でござります。然らば、其盗品は何であつたらうか、さあ是が研究問題でござります。證書類であつたらうか。證書類が櫃へ收まつてゐる譯も御座いませす、目録が取れない譯も御座いませせん。私の見込では、此は必ず安全に賣買の出来ない種類の物であらうと云ふので、

「然云ふ物を、又何の必要があつて持出したのだらうか。」

「さあ、其處が即ち此事件の秘密、研究問題なのでござります。若し其品が何であつた乎とのお尋なれば、私は、其は即ち天田が始終自分の身邊に保存してあつた、何ぞ大切な秘密の物であらう、と慥うお答をするより外ないのでござります。新聞にも出てゐるとほり天田が兎角盗品を明示しないらしい。警察官へも此々だと訴へるのを避けて居るらしい。苟くも櫃のなかへ收込んである位の物であつて見れば、所有主が其中味が何であるかと云ふ事を知らないと云ふ理由はないのでござります。詰り天田は、自分以外に洩すのを好まないのです。然し不思議にも、私は其理由を説明能るのでございます。此は貴下だからお話をするので、謂はゞ職業上の秘密、何か他へお

洩し下さいませんやうに希望致します。」

「大丈夫だよ。」

「私の胸には別に又妙な事實が伏せてゐるので、其をお話すれば、此の事は自然に明かに成る。先づ第一に貴方は柴垣男爵とは無二の御友人でお出なさる。而して柴垣さんは、近々一年か一年半のうちに、相場や何かで、大變な御損をなすつた。いや、知つてをります。丁と知つて居ります。——第二に柴垣男爵は天田金兵衛氏の令嬢と御結婚に成る筈でござります。第三には大川岩藏と云ふ人物は、貴下の近頃のお合で、其娘の行方搜索の依頼者であるのでござります。さあ此の三つ、此が皆箇々別々の事實であるのでござりますが其を私が一つに纏めやうとするので御座います。」

「はてね。」と、自分は念はず目を丸くした。

「さあ、此が首尾よく一つに纏まれば一入のお慰みでござりますが、此に又別に一つの事實があるのでござります。是も今の三箇と一つに成るのでござります。貴方は曠不思議にお思ひなさるでございませう、借其は天田と盗難の事件で、天田は盗品が発見せられやうが、爲られまいが、大した痛痒を感じないやうに言つてゐる。が、一方

彼は去る一箇人に向つて、彼櫃を元の儘に取戻しくる、者があるならば、千圓の謝禮を爲ると公言したと云ふのは、頗る注目すべきでは有ませんか。」

「千圓の謝禮？事實か、其は。」と自分は愈よ事の奇異に驚いたのである。」

(三十六)

「全く事實でございます。」と小名村は「尤も私 が引受けた事件ではございませんので、又之を貴方にお話するのも、何だか工合の悪いやうな次第でございますが、若し此に其櫃を持つた人があつて、其が狡猾な人間であれば、天田に對して、此際甚度條件でも持込めるのでございます。」

「して肝腎の其櫃の内容は一體何なのだ。」

「其は少々猛烈なものでございます。お話するのも何だか妙でないのでござります。」

「猛烈？其奴は愈よどうも食指が動くね。」

「貴方は今日は格別に急ぎでもないのでござりますか。此お話に就いて、もつと聞きたいと有仰るのでござりますか。」

「無論聞きたい。既に聞いただけでも、非常な興味を感じたのだが、其だけでは頼と要領を得ない。加之此話が、柴垣男爵及び大川老人に關係してをると云ふ君の鑑定であつて見ると、愈よ聞かすには置かれないので、君の考へただけ、知つてゐるだけの事を、一つ悉く話して貰ひたいものだ。」

「と云ふ、先づ私の見込なのでございます。關係のない事でしたら、御容赦を願ひたいので。」と小名村は茶を飲みながら、

「いや、はや、誠に下らん商賣でして、人の秘密を噴出して飯を喰ふなどは、餘りどつとして居りませんが、爲方がありませんや。其處で、日々の新聞に出る盗賊の種類も澤山ございます。然し貴方は未だ、所謂魔酔食と云ふ奴を御存でございますまいな。」

「そんな貴は知らんね。」

「魔酔食と云ふ奴が、往年行はれたのでございます。もう餘程古事でございますから、記憶して居る人もござりますが、何しろ可恐い手段でございます。無論盗賊の種類には相違ないのでして、所謂魔酔食を仕込んだ菓を種子に造つたのでござります。」

す。此に例を挙げてお話をしませうなら、先づ一箇の人間があつて、假に其名を中村とかして置きませう。此人物が、横濱の去る商會から信用せられて、東京から或貴重品を持つて行くとしませう。即ち貴重品は手提鞆の裡に收つてあるので、其は約四千萬のダイヤモンド、外に六千圓の約束手形なのでございませう。即ち總計一萬圓でございませう。中村は商會の信用を受けて、總て這般種類の依託を受けてるので、商會と云ふのは餘り評判の好い方ではなかつたのでございませう。随分秘密の取引なんかを行つて居つたそう。然し先お那樣事は何でも宜いとしまして、中村は件の鞆を提込んで上等室へ乗込んだのでございませう。汽車が丁度出やうとする時分に、突然一人の乗客が乗込んで来たとお思ひなさい。此人物を假に林と名を命じて置きませう。林は一方の隅に腰掛けてをります。別段の事もございませんで、汽車は一度二度と停車場で駐ります。此間驛夫の目には單に此二人の上等乗客が向合つて座つて居るばかりで御座います。神奈川へ着きました時分に、後に乗つた林と云ふ男が、あたふた客車を飛出して、後で聞きますと大層惶て、何だか歩き振が危しかつたと云ふ事でもございませう。」

「其が掏兒か。」

「いや、先お聞きなさい。後に残つて居るのは以前の中村一人でございませう。此が横濱へ着いても一向に降りて来ません。驛夫が戸を啓けて入つて見ますと、變です。昏睡して居るのでございませう。起してやらうとすると、眞箇の眠睡でもないうやうで、何か死んでいも居りませんかと思はれる様子ですから驚いて客車から擔出して早速最寄の醫師を呼ぶと云ふ騒でございませう。」

(三十七)

小名村は猶も話を續けて、「で、最初中村を診た醫者は、此は酒に酔つたのであらうと云ふ断定を下したのです。けれども、段々診察をして見ると、其は誤診で、眞箇は泥酔状態でも何でもない。彼を昏睡せしめたのは一種の麻醉剤に外ならぬと云ふ事が解つて来た。さあ騒ぎです、警官も出張する。警察醫も来る。二時間弱も経てば、魔藥の効力は亡つて舊の情態に復すると云ふので、先づ靜に安臥せしめて置いたのでございませう。」

「は、其が所謂の魔薬なるものか。」

「さあ愈々二時間経つて、中村は徐々正氣に還つて来ました。何も不思議な顔をして居る連にさよ／＼して居る。此は一體何處だらうと首を捻つて居る。すると、段々記憶力を喚起して来て、ト、身の周を捜すのです。言はずと知れた靴の無いのに氣が着いたので、驚いたの驚かぬのつて、着くなつて了つた。で、中村が目覺めたので話が解つて来たのでございます。先づ林が汽車に乗込んだ時は脱つこの姿であつたが林の調子が暮進に好いので、一つ二つ話を交へるうち、遂意に成つて了つたのであるが、林は話の序に自分が可恐しい喫煙家である事を拾つて、貴下は道徳は如何ですなどと、珍しい上等の煙を與れる。いや、實に貴は私の第一の嗜好でございますが、遂時間になくて、ステーションで間に合を求めたものですから、先刻から貴方のお賚の匂を嗅ぎまして、連に煙を垂して居つたのでございます、と云ふので一本を口に啣へる。林もすば／＼喫してをる。何でも其實は非常な趣味の品だつたさうで、柔くて甘くて、實に何とも言へない心持であつたさうでございますが、三分の一も喫つたか喫はぬに、好い工合に睡氣が襲つて来て到頭前後不覺に眠つて了つたのださうで

御座います、林が與れた葦に薬が仕込んであつたのは、争ふべからざる事柄で、後で掃除夫が吸差を拾つて試みに吸つて見たところ、妙な心持になつて段々一種の愉快な睡眠状態に陥らうとしたさうで御座います。扱林を捕縛と云ふ事に成つて、手もなく其筋の手に取押へて、色々取調に取掛つたのでございます。捕縛は實に敏速であつたさうで、物の五六時間も経たぬうち、彼は乍ら籠の鳥と成つたのでございます。

「それは又、餘り造作なさ過ぎるじやないか。」

「眞箇でございますな。然し事實然うであつたので、取調の結果、靴が出て来たと同じ時に物品も發見せられたのです。處が此に不思議な事がございまして、と云ふのは、中村の申立てでは一萬圓の品が收つてあつたと云ふのに、今林の手に在るのを取調べて見ると云ふと一萬の五分の一、即ち二千圓しか入つて居ないので。而して其二千圓はダイヤモンドではなくして、約束手形のみであつたのでございます。詳しく申せば、紛失した分は、四千圓のダイヤに六千圓の手形、即ち合計が一萬圓、まあ是だけの高になるのでございます。借手に残つてゐる二千圓の手形の中には天田なる人物から支拂約定のあるのが二百圓づゝの額で三枚、都合六百圓あつたさうでございますが、

紛失した分にも矢張り同一の人の手形があつたさうで、其額は手に残つてゐる分の三倍、即ち一千八百圓なのでございます。」

「都合二千四百圓か。」
「然やう〜。で、其は其としておさまして林の申立が頗る面白い。甚麽事を言つてゐるか云ふと、餘程あやふやで、寧ろ滑稽なくらゐる要領を得ないのでございます。」

(三十八)

小名村は更に語を續いで、「林が訊問に對しての答辯の要點を申しますと、其を相手に與れたのは事實である。而して自分が其を吸つたのも事實である。其を飲むと、何か眠氣を催して來たのも亦事實に違は無い。が、大森か河崎あたりで一人不意に飛込んで來た人間があつた。何も其人間が怪しいので、面識は覺えはないが、突如件の靴を取つて林に手渡をした。が、渡す前に中から何か引出して自身に懐中したのは確である、と、まわ言ふのでございます。頗る曖昧な言で此には判事も警察官も一同念はず失笑したと云ふ話でございます。林は無論犯罪者と見做されて、三年何箇月といふ

處刑を受けたのでございます。此で先づ、中村と林との關係事件は一段落を結んだのでございます。」

小名村は語來つて目を耀しながら、速に其を喫すのであつたが、何か自分の質問を促し顔であつたので、

「其話の中の天田と云ふ人物は、柴垣男爵が娘を貰はうとしてゐる彼の天田と同一の人物か何うかね。」

「同一の人物でございます。」
「では、紛失した分は、其後發見せられたのかね。」

「些とも出ちや來ないのです。」
「して何云ふ手段を以つて、其紛失品を探索したのだらう。」

「先づ新聞に廣告したのです。而も大略事實を附記して廣告をしたので、殊に約束手形に重きを置いたのでございます。何しろ五百圓と云ふ懸賞であつたのでございますが、一週間も續けて出して、結果は無効であつたのでございます。」

「それでダイヤモンドの方は、有れば直其品だと云ふことが解るのだらうか。」

「目章があるかと有仰るのでございますか。其が何れも奸商の手に渡ると云ふと、爲様ののないものださうでして、贓品は又それ／＼巧く誤魔化して取扱ふ。其でなくとも金剛石なんぞは何處かへ紛れ込んで一へば其限で。而し其中に容易に見着かるものが一つ有るのでございます。其は大きな黒真珠の顆ださうでして、此が一種特殊の形を具へてをるので、直に見着るべき筈だつたのでございます。」

「では其の手形の支拂の方は、奈何なつたのかね。——天田の義務を負つてゐるといふ手形の事だよ。」

「手形はなくとも、徳義上天田の支拂ふのは當然でございますが、其に就いて色々悪評が擴つたのでございます。即ち天田氏は、其紛失手形に向つて、義務を負ふ必要はないと主張したさうでございます。酷く不信用であつたのでございます。所詮自分の捺印の有るものならば、正當に銀行から支拂をするか、其でない以上、何等の責任をも持たないと彈つけたので、爲に商會の方では、訴訟を提起するなど、脅しの強談判でしたが、所詮は泣寝入です。どうも天田の遺方が奇麗でない云ふので、種々議論もあつたやうでございます。いや貴方の感情を害する意じやありませんが、話の勢

ひ、天田氏の悪口も已むを得ん場合、御勘辨を願ひます。」

「那樣奴があるものか。一體天田其人の人物に就いては、私より君の方が遙かに詳しくのだ。」

「自慢じやございませんが、當の婿君、柴垣男爵よりも詳しい意でございます。」

「無論さ。事實を述べるのに、那樣遠慮は反つて可けない。が、君は今話中の人物に、假定の名前を用ひた。そして被害者の名を中村と謂つたね。」

「まやうやう。」

(三十九)

「其から犯罪者の名を林と謂つたが、其も假名か。」

「假名でございますよ。實は保坂周平と謂ふので。然し中村の實名は失念致しました。此は大した必要もない處から、忘れて了ひましたのでござります。處で此保坂周平と云ふ人物の申立に據りますと、第三者たる一個の人物があつて、突然客車へ圓入したと云ふが、貴方は此に就いて何云ふお考をお持でございますか。」

「何等の考も起らんね。」

「實に妙じやございませんか。ね、若し此第三者なる者が、果して有つたとすれば、其は果して誰でございませう。而して其人物は何爲たのでございませう。此怪しむべき第三者に對して、探偵の實が擧つた曉には、餘程面白い事實が発見されるだらうと思ひます。」

「いや、君の想像力の逞しいには驚いた。して君は、其の第三者を悪人と断定するかね。」

「其處どは未だ判断を着けますまい。然し保坂なる人物は氣毒でございます。私の考へではあの處刑は些と慘酷だらうと思ふのでござります。」

「じや保坂は冤罪を蒙つたと云ふのか。」

「然うも確言は出来ませんが、何しろ彼の靴と魔酔良との事件に就いては、取んた災難を背負つたので、謂はゞ貧乏圖を引いて、人身御供に擧つたのでございませう。何か天田の手には贖造證券が有るとか、贖造手形が手に入つたとか云ふ噂も聞込みました。が、那樣事は別に深くも研究しません。左に右、此の事件を正面から見るとは、

到底真相を知ることが出来ないので、他の側面から研究して行つたなら、或は意外の事實が発見せられるだらうと思ふのでございます。」と小名村は食を輪に吹きながら、何か諷するやうな目色をした。

「どうも何だか全龍を見ないやうな氣がするが、一體今の話は天田の盜難事件と、何か關係があると云ふのかね。」

「先づ有るでございませうな。」と小名村は薄笑をしてゐる。

「其が何も、私には些とも解らない。餘りに突飛な想像ではないか。」

「此が貴方に解りましたら、其こそ私が驚いて了ふのでございます。貴方法律にはお詳しくつて在しやいます。這座事にかけては、恐らくお素人だが、私はお蔭と此道にかけて 甲羅の生えた方でございます。恙うと睨んだ眼は、大抵外れつこはない意でござります。」

「其で、未だ話が續くのだらう。」

「若し御體屈でなければ、まだ一申上げてても可うござります。」

「然し、聞けば聞くほど混雜して來るばかりで、頓と要領を得んのでね。」

「御尤でございます。其じや明晩の前講に願ひませうか。」

「と謂つて。此だけでは海とも河とも着かなし。」
「其では一つ演つて了ひませうが、えいと、今の其の犯罪者保坂周平の身の上でございます。彼は三年何ヶ月と云ふ刑期を、無事に経過すれば、至極都合だつたのでございませう。處が何した事か、巢鴨の獄監へ打込まれてから、物の半年も神妙にしてをりましたが、不圖脱獄を企て、其が運悪く發覺したのでございませう。尤も其謀者……と云ふよりか、寧ろ主謀者が有つたので、保坂は深く自分の罪狀に不服を抱いて居つた所爲でございませうが、遂其仲間に加はつたものと見えます。處が行損つたのでございませう。看守に見着りさうに成つたので、立ろに劇しい立廻が始まつて、彼は念はずも看守を斬つて了つたのださうでございませう。」

(四十)

「今ぢや無論然云ふ事もございませませんが、何しろ十七八年も昔の事でございませうから囚人の取扱も随分苛酷であつたのでございませう。殺す氣でも無つたでせうが、根が

其れ士族の零落で、腕に覺があるのですから堪りませぬ、看守に抜劍で脅された處から、遂逆上して腕が鳴つたのでございませう。仲間は二人も斬られました。保坂は手擦を負つたくらゐで、先づ取押へられたのでございませう。其が爲め彼は到頭北海道へ送られて了つたやうな始末。處が北海道でも第二の脱獄を企てて、今度は首尾よく成功したところから、ウラジオストックへ高飛と出掛けたのでございませう。」

「ひ、其から奈何したね」

「其から後は治外法權ですから解りませぬ。然し北海道で脱獄した時分は、なか／＼嚴重な探偵で、私は當時警視廳に居りましたから自身關係もして居つて、東京に潜伏して居はせんかと云ふ後が、色々手を盡したこともございませうが。後にウラジオへ渡つたと知れたのでございませう。保坂も此に至つて、到頭金箔着の悪黨とは成つたのでございませう。」

「……………」

「是で先づ表面の事實の話だけは済んだのでございませう。扱此からお話をしやうと云ふ事實が、丁と此と一ト纏めに成るのでございませうが、私も或一方から依託を受けた事

もございませぬ。尤も其は直接に依託を受けた譯でもございませぬので、其依託に應ずるか應じないかは、今なほ疑問中なのでございませぬ。即ち其依託者へ盡力する事に成れば、哀な人間一人を暗闇へ突落して下はなくなりなすのでございませぬから、仕誼に依つては局外に立つても可いのでございませぬ。此事情をお含みに爲つて、私は何時でも貴方のお指圖に依つて働く、貴方の希望どほりに運動をするに當つては、他に何等の故障があつても、更に頓着しないと云ふ事を、御承知を願ひたいのでございませぬ。」

「君の言ふのは、私には何だか一向解らないではないか。」

「ですから、以上申し上げたお話の裏面があるのでございませぬ。其を打明けてお話をするには、嘘と貴方が私に此事件をお委しに成つた以上でなければ可いのでございませぬ。詰り一方からも依託せられて居つて見れば、設し其が間接であるにしろ、貴方へ理由なしに秘密を申上げる譯にも行かないのでして。」

「では君は私の依託は拒むといふのか。」

「いや、然うではないのです。私も執に傾くにしても、人を傷付けなければなら

ない仕事でございませぬ。が、只今のところ、昵と一方の方を受合つた譯でもないのでございませぬから、謂はゞ自由の體でございませぬから、若し貴方が、然らば何方を引受けたい氣かと有仰れば、私は無論貴方の方を引受けたいのでございませぬ。」

「君の胸にある事を洗ひ浚ひ聞してくれ給へ。私は真箇迷つて下ふよ。」

「ですから、貴方は大川岩藏なる人物の事に就いて、私へ御交渉……。」

「さあ、其の大川岩藏の名を、茲で引出す理由が解らないではないか。」と自分は憤れ憤れするのであつた。

小名村は弱つて、多時まじくして居たが、良久あつて落着いた調子で、

「貴方は大川の依託をお受けに成つて、千圓と云ふ金さへ請取に成つて、其ですから貴方は當然大川に對して依託の責任を負つてお在になる。」

「無論だ。」

「若し此際大川に反對の側の人に来て、貴方に向つて、大川へ反對の運動をしてくれろと頼んだら、貴方は何爲ますか。」

「無論拒絕する。」

「拒絕の理由を説明する必要がわかりますか。」

「無論大川への義務として、理由は與へないね。」

「でせうな、然うなくちやならないのでございます。若し大川が、續けて私に其事件を託して居つたなら、私も無論然うする所でした、然るに大川は委任を解いたのでござります。私は大川に對して、何等の義務も無いのでございます。」

「じう、だから何う爲やうと云ふのだ。」

「一ですから、私が希望致しますのは、丁と取極めて頂きたいと云ふのでございます。然うしないと、私は理由なくして、他の一方の依託を拒むのも工合が悪いのでして、又自分一箇の道樂の爲に、他の惡事を發くと云ふ好奇は出來ないのでございます。且つ然うしましては、後で反つて貴方のお怨を買はないとも限らないと云ふ事情があるのでござります。で、私に御依託下さるなら下さるで、唯相談をするとか、意見を聞

くとか言ふのでなくて其だけの手續を踏んで御依託下さりたいのでございます。露骨に申せば、報酬の如きも、多少に論なく、一つお手渡を願ひたいのでございます。然うすれば、大川に反對の側から仕事を頼まれても、其を斷然拒絕する口實があるの御座います。」

「宜しい、解つた。では、君は大川の反對の側からも依託を受けやうとして居ると云ふので。」

「然です。萬望速くお取極を願ひたいのでございます。」

自分は全く五里霧中に彷徨せざるを得なかつた。けれど小名村の口氣は頗る熱心で且つ眞面目である。其言の底には、定めし深い意味があるのであらう。彼は決して人を弄ぶ人間でないのは、其平生に徴しても明かな事實で、自分は又、大川の言をも憶出した。彼は娘の行方探索一件を自分に託した時、此依託事件に就いて御盡力下されば、自然柴垣男爵の危急をもお救ひに成ることが出來るとの意味を洩した。而して、小名村も亦現に、此等の事件は都て大川と天田と柴垣と、互に密接の關係を持つてゐる見込であると公言するのである。自分は大川の利害よりも、先づ柴垣の利害に關係

のゑると云ふ點から、一刻も早く、事件の真相が知りたかつたので、多く思案する迄もなく、全然小名村をして此事件を引受けしめやうとは決心したのである。

「ではね、此秘密事件は、一切君に依託する事にしやうから、先づ五十圓だけ預つておいてくれ給へ。」と金を取出したが、

「五十圓は多過ぎます、五圓で澤山でござります。」と推戻す。

「でもまあ、一私人として着手する以上、如何なる必要があるかも知らんから。」

「然うですか。ではまあお預りをして置ませう。此で先づ、一方の口は私は十分斷が出来ると云ふものでござります。で、保坂の脱走事件を、もつと詳しく申しあげる前に、大川が私に如何なる事を依託したかと申すことをお話しなせう。」

「是非聴してくれ給へ。」

「驚いては可けませんよ。」と小名村は更まつて、「大川の私に依託したと云ふのは、即ち汽車中の魔薬責、盗まれた靴、此事件の真相を取調べてくれると云ふ事なので御座ります。」

「何？」と自分は念はず叫んだ。

「其と同時に、善く注意をして探偵をして欲しい人物は、實に天田金兵衛其人だと云ふ事で、此人間から事實の真相を探り出してくれると言ふのでござります。此人を探つたなら必ず事實が解ると云ふ大川の確言なのでござります。」

「其奴は妙だね。」

「處が、まだ妙な事が有りますので。」

(四十二)

「私は、勢ひ此の不思議な探偵を託した、其當人の身の上が知りたくなつたのでござります。」

「如何にもね。」

「私はウラジオから一人の曲者が來てをるから、若し何ぞ手係があつたら知らしてくれろと云ふ、些と其筋の友人から相談を受けて居る事があるのので御座いまして、大川は必ずしもウラジオから來たのだとは斷言は出来させんけれど、萬一と云ふ疑もなきにしも非ずで……殊に私の注意を惹きましたのは、彼大川岩藏なる者が、故なくして

不意に富士見町の宿を引拂つた事なのでして、何も不思議に思はれたのでございます」
「成程然う聞けば、言語舉動すべて不思議の點が多い。」と自分も首を傾げるのであつた。

「ですから私は、幾二十年以前の出來事を今日に成つて探偵をして欲しいと云ふ大川の依託に就いては、實は非常に心が動いたので御座います。何の爲に彼は今更其事實を探偵する必要があるのであらうか、何の爲に彼は天田を詮索してくれろと云ふのであらうかと種々搜つて見たのでございませう。雖然大川は一言も此疑問に對する答辯を與へないではありませんか。而已ならず、彼は泡を喰つて、富士見町の旅館を引拂つて、迹を晦ましたのでは有りませんか。」

「ひ、大いに意味がなくてはならないね。」

「猶また其娘の事に就いても、芥子程も談はなかつたのでございませう。大川の事は先づ措きまして、先刻お話ししました保坂と云ふ脱獄の曲者、其後頭について少しく申しあげておきますが、もうお聽飽でございませうな。」と自分の顔色を見る。

「君さへ辯り憊れなければ、私は残らず聞い置きたいと思ふ。」

「保坂は浦港で、大層金儲をしたさうで御座います。初め日本人の商館に備はれて、何か書記のやうな事を行つてをつたさうで御座います。一年半目には、金主を見つけて、自分で何か雜貨商のやうなものを初めた。無論能登の七尾や兩館あたりへも往往仕入に來たさうで御座いますが、此の商業が大いに成功をした處から、引續いて二投機事業を企てて、到頭四五萬の金を拵へたと云ふ風聞なので御座います。けれど悲しい事には、彼は内地へは足踏の出來ない人間でございませう。倍此人間が、今現に虎口を犯して、吾々の近くに居る、と申さなくとも、貴方は大概御見當がお着きなすつたで御座いませう。」

「大川岩藏なる者が其だらう。」

「私も其處へ目星を着けたのでございませう。」

「其話の模様によつて、天田金兵衛と云ふ人間が何か悪黨でなくてはならない。」

「さあ、其處のところは、未だ何とも斷言は出來ませぬ。殊に貴方の御友人、柴垣男爵の未來の男であつて見ると、輕卒な斷定は下せませぬので、私は切に天田氏の潔白ならん事を希望するので御座います。」

「無論それは吾々の希期する處だ。けれども事實は曲げ難い。取調べるならば、結婚の前に於て、十分詮索をする必要があるので……。」

「其秘密を發くべき鍵は、大川が握つて居るので御座います。此は是非大川から聞出す必要があるもので御座いますが、私では可けない。貴方が宜しく、悦けて巧く實をお吐しなさらなくては可けない。」

「眞箇だ。萬望巧く大川に會ふ機會があつてくれれば可いが……。」

「其は譯は有りません。と云ふのは、私のやうな探偵と違つて、貴方には通陰をする必要がありませんから、今にひよこり遣つて來るでございませうよ。」

(四十三)

彼此四時間に亘る彼の物語を聞畢つた時、自分の頭はボツとして了つた。旅て小名村の家を辭して、其足で柴垣男爵を訪れやうと思つた。凡そ小名村が自分の前に差出した此の「智慧の輪」ほど複雑したものもないが、亦是ほど面白い謎もあるまい。其の裡路は幾んど想像の及ばぬ秘密を持つて居るのであるが、然ると小名村の言ふが如く、此等數箇の疑團が、一個の事實に歸着するに過ぎないのは、大抵推察しても解るので、其を確言し得られぬのは、要するに證據がないからである。小名村も亦、其證據を得やうと力めて居るに過ぎない。何れにせよ、自分は好材料を得たのである。

柴垣を訪ねると、彼は曩の日會つた時よりも、一層陰氣に成つてゐる。書齋に籠つて何か新刊の書物を繕いて居たが、自分の顔を見ると相渝らず可憐しい笑顔を作つて、

「多時だつたね。」

自分は椅子に倚つて、「奈何だね健康は。」

「難有う、何處が何と云ふ事もないが、何だか發揮しないね。」

「彌張類似失戀と謂つたやうなものだらう。」

「は、酒落どころじやない、僕一生の問題だ。」

「眞箇だ。鞆子さんには其後逢ひはすまいね。」

「何の面目あつて逢ひに行けるものか。逢ふだけ苦痛を感じもするからね。だがね小村君僕弱つたよ。」

「恁云ふ境遇に立つて弱らんものは、恐く無神經だ。」

「いや、更に弱つた事があるのだ。新に疑惑が生じて来たのだ。」

「何云ふ疑惑かね。」

「春江の父が、縁を取結んでから、果して僕の爲に僕の家政を整理してくれるだけの親切があるか奈何か、と云ふ事が氣に掛つて来たのだ。」

「其は今に初まつた譯ではないではないか。其を疑る目には、此結婚は破談にするより外あるまい。」

「破談にすれば、忽ち債鬼の苛責、僕の名譽は立ろに蹂躪されなければならぬ。僕は寧ろ一死を以つて此難關を脱れやうかと思ふくらむのだ。」

「死ぬ？莫迦な。其こそ罪惡の上に罪惡を作るのだ。死んで此難題が消えるものなら至極賛成だが、君の不名譽は依然として遺つてゐる勘定だ。無論君一箇は其で安全かも解らん。然し到底卑怯の手段たるを免れない。」

「ぢや、君は天田との結婚を實行した方が可いと云ふ説か。」

「全く然うでもない。君は終生不幸たることを免れぬと云ふ、虞がないでもないから」

「では非結婚説か。」

「然うでもない。然し柴垣君、然う心配したものでないよ。」

「氣樂を言つてら。ではまわ僕断然實行するとしやう。其で充らなかつたら、又其時の思案だ。」

「は、氣の弱いことを言つてゐるな。」

「君は嗤ふが、僕は今の場合、眞箇思案に盡きて居るのだからね。其は君のやうな聰明なる人の目から見れば、僕の爲る事なんか頓馬だ、到底君の嗤笑を免れない。」

「それは僕も、君の心事は十分察してゐる。然し僕は、君よりか鞠子さんが氣の毒だ」

「む、鞠子！其も元はと謂へば、僕か主動者なのだ。親もあり、兄弟もある身の上なら、然程にも思はないが、何しろ天涯孤客の身だ。僕を失つたら、明日から路頭に迷はなくちやならない。」と柴垣は心弱くも目に涙を浮べたが、「其に就いて、君に少し頼みたい事があるのだ。」

(四十四)

「何でも頼まれやう。」

「外でもないが、鞆子から目を放さないやうに注意をして居てくれ給へ。」
 「宜しい。早速今日にも訪問して見やう。」と自分は快く承諾した。
 「差當り困るのは金だらうから、此に五十圓だけあるから、此を持って行つて與つてくれ給へ。多分推戻すだらうと思ふが、其處は君自身の財布から出たやうな談にして強ひても受取らしてくれ給へ。」

「承知した。然し金は僕も持つてゐる。鞆子さんを救ふ事が出来れば、此金も大いに活用せらるゝと謂ふものだ。實は然云ふ性質の出所なのだ。」

「いや、其では可けない。實は天田が、至急金に困つてゐるやうな事はないかと聞くから、差當り必要はないと言つたのだ。すると、先此を取つて置けと云ふので、二百圓ばかり當座の小遣として與れた。客なやうでも、切れる處は切れる。但君も御存知の那の人格だから何となく、金を貰ふのも不気味な気がするのだ。」

「ではまあ、金のことは後として、天田の盜賊に就いて何ぞ手掛があつたかね。」

「何だか、頼と消息を聞かないね。けれど新聞紙の言ふのも、少し大仰さ。第一金庫とか、櫃とか言つてゐるのが誤聞で、實は押入の櫃の底に收つてあつた古い蒔繪細工の

管に過ぎないので、其を縦横十文字に針金で結へて、些と取出せないやうに底に錠が附けてある。其針金を切るのに骨を折つたばかりなので。」

「して見ると、餘程貴重品と見えるね。」

「大した貴重品でもなからうが、何しろ個人の人天田の事だから、三十年も大事に持つて居る筈ださうで、泥坊も其を重寶が收つてゐるとでも思つたのだらう。」

「君は天田から、其話を聞いたので？」

「いゝえ、天田は盜難一件に就いては、極めて冷淡な顔をして居る。然し僕の推察では那以來天田の様子が少し變つて來たので、盜難の話が出ると、力めて聞かないやうにしてゐるだけ、妙に心配をしてゐるやうにも思はれる。」

「其は變じやないか。」と自分は、小名村の話と符合する處があるので、思はず叫んだ。

「詳しいことは春江の母から聞いたので、其を又、何の必要があつて僕に話したと言つての天田の剣突さ。妙な老父もあつたものさ。一體盜難に罹つたのを、非常に耻辱とでも思つて居るらしい。其とも其しきの事に騒ぐのは外聞が悪いと云ふ、僕への見榮かも知れない。」

「那樣事かも知れないね。」と自分は氣の無い返辭をして、「然し柴垣君、僕は少し考へる處があるから、春江さんとの結婚は餘り急に行らん方が可いね。」

「其は又何した理由だ。實行するものなら、一刻も早い方が可いではないか。」

「理由は今暫く説明する譯には行かん。然し左に右急でない方が可い。」

「僕と雖も、無論急でない方が好ましい、然し、何の道免れぬ災難なら、一日も速く形を着けた方が好いではないか。僕は既に運命の宣告を受けた人だ。他に自ら救ふべき策のない以上、潔く運命に服従しやうとやないか。」

「其も可からう。然し鞠子さんの身を思はんのか。」

「鞠子の事なら、再び言はずに置いてくれ給へ。君は又、今日に限つて、何して然う僕を苛めるのだ。」

「可し、其では言ふまい。僕はお暇をしやう。」

と、自分は何か連に氣が忙しいので、不圖起上つたが、柴垣は其を留める勇氣もなかつた、門を出て宿を指して道を急ぐうち、自分は不圖、一個の異しげな人物に、迹を尾けられて居るのに氣が着いた。

(四十五)

一度ならず、二度ならず、自分の前へ廻つては自分の顔を覗込むやうにするのが、如何にも氣にも爲るので、自分も立停つて、

「私の迹を尾けて、何を爲るのです。」と詰りながら其風體を眺めると、其は四十餘の男で坐り職人か、何處かの小使と謂つたやうな柄で、頭を掻きながら腰を屈めて、

「若しか間違ふと可けませんと存じまして、へい。」と辭義を爲る。

「何が間違ふ。」

「いゝえ、善く見定めた上で。口を利いて見ると、道塵に附吸かつたものですからな、へい。」

「怪しからん、何を見定めるので。お前は一體何者だ。」と鋭く言つた。

「お懼りなすつちや、酷く恐縮でござりますが、手前は其の、決して悪い者ではござりませぬので、へい。實は貴下様までお道に參つたのでござりまして。」

「何の使だ。」

「お手紙でございませうが、」と懐から一封の手紙を取出して、「是を其の、お宿まで持つて参つたのでございませうが、お宿にお出がなれば、其處で柴垣様のお屋敷を聞いて其處へ持つて行くやうとの事でございまして、實は先刻から御門前にお待申して居りましてございませう。」と慌々述べながら、「貴方さまは小村様と有仰いますので。」

「小村は僕だ。」と手紙を受取つて見ると、表書には宛名ばかり、中には「至急お目にかけりて御話申したる儀有之候、小村殿、老友」と記して、側に小く下谷二長町二百五十番地某方」と書添へてある。委細を聞かす間もなく、使の男は早く彼方に立去つて了つたので、自分は言ふまでもなく、大川老人からの手紙と推して、其ま、俵を儲つた。

二長町の其番地先で俵降りて、某方に就いて大川を尋ねると、四十軒の内儀さんが出て、此方には那樣人はお在がないと云ふ。自分は不思議に感じながら、二三軒軒別に門札を見て行いてみると、突如に

「やあ、小村さんでないか。」と上から呼ぶ聲がする。驚いて仰いで見ると、只有る汚い家の二階の鐵の格子の間から、海氣味の悪い笑顔を突出してゐるのは、大川老人で

ゐる。

「此方じや〜。萬望お上り下さる。」

自分は格子戸を啓けて、薄暗い茶の間から、危い段梯子を登ると、上は六疊の天井裏海汚い畳の上に毛氈を敷いて、火鉢に倚りながら新聞を読んで居たりしい。

「何しましたな。」

「此じや番地が大變の相違だ。」と自分は不平がましく言つた。

「其番地を、私も不圖取違へてな、どうも失敬じやつた。」と事もなげに笑つたが、自分の推測では、都合上故と偽番地を使つて置て、自分の來るのを、上から番として居たに相違ないのである。

「貴方は偽番地を遣つたのですな。」

「然う思はれますか。」と憚としたやうな目色をする。

「貴方は何かを、大層秘密に爲られるやうですな。」と重ねて訊くと、

「それはまあ此方の事じや。私の勝手じやらうじやないか。は〜。」と笑に紛す。自分は此の調子が妙に氣に喰なかつた。一體用事があるからと謂つて、呼寄せておきな

ら、然どては無禮の仕打と、聊か腹に据ゑかねたが、大川は頓と無頓着で、顔を曇りながら座り直した。

「貴方は何處ぞ痛むですか。」

「實はな、三四年以前から僕麻室斯で惱んで居りますので、其に此の四五日風邪を引いたかして、酷く工谷が悪い。失禮じやが、其の床の間の薬瓶を取つてお與んなさい。」

(四十六)

大川老人は薬を飲んで、「私も恚して、よぼぼしてゐるうちに死んで了ふのじや。先は丁と知れてゐるが、借ごうも生命は惜しいものじやて。あゝ充らん世の中じや。」と重い溜息を响いて、

「何じやな、私は悪い人間に見えますか。」

「然うは思はんですよ。」

「私は時とすると頭腦が濃茶苦茶に成つてからに、何か恚う世の中が癪に觸つてなりん事がある。でもまあ、氣は確だから安心しなさい。定めし變な爺だと思ひなされる。」

じやらうけれど、私じやからとて當初から變な爺でもなかつたのじや。中頃不圖した不幸から、體は悪くなる、氣は變に成る、誰の顔を見ても鬼か何ぞのやうな氣がしてならぬのじや。然しお前さんは格別じや。其處で、お前さんは私が姿を隠したので、慥可笑いと思ひじやつたらう。」

「大に訝つて居るので。」

「其に就いても、大に理由があるのじや。」と、大川は多時自分の顔を頷めて居たが、

「其處に靴の横に聖書がある、私も色々の不幸から、遂神様を信じる氣になつて、今は基督教の信者じやが、萬望其の聖書をお持ち下さい。」

「聖書を。ぢや私に誓へと言ふので。」

「如何にもお前さんに誓つて戴きたいので、私が今お話をする事を、必ず口外せんと云ふ事を誓つて戴きたいので。」

「自分は些と躊躇した。自分は今基督教信者といふではないが、一度は洗禮をさへ受けた身である、神に誓つて人に口外すべからざる秘密を、聞く可き必要があるので、うか抑も聞かざるべきか、と惑つたのである。」

「驚きなさるかも知れぬが、此は私自身の爲に誓つて戴くのではなうて、實は今お尋ねを願つてある私の娘の身の爲じや、又此の話をせんければ、お前さんは到底私の娘の詮索は出来んじや。じやから、誓うて誰にも話さん秘密をもお話しするのじや。然うでないも、可哀さうに、何にも知らぬ娘が酷く外聞の念をして、辱を擡くやうな始末じや、此間私が柴垣さんが一生私に恩を被るやうな事を爲て見せると言ふたが、他をお忘れではあるまい、私は吃度其位の事を爲て見せる、丁と其用意が出来て居りませるので、其の續は所詮お前さんに歸するのじや。此で私が柴垣さんの身の上において知つて居る事が二つ有る。一つは莫大の負債を背負つて惱んでをられる事、今一つは天田金兵衛の娘と縁組を結ばるゝ事、此上は言ふまい。言はずとも十分なのじや、那の晩も、私は確かお前さんに誓うて戴いた。今夜は一つ娘のために、其の悪書に接吻がして貰ひたいので。」

「宜しい。其じや誓ひませう。今お話なさる事が、貴方の客に成るやうな場合には斷じて他言はしません。」

「其でこそ、私は一身をお前さんの手裡に任す事が出来る。其處で、私は一體何者であるか、又本名は何と云ふ者であるか、と云ふ事をお話もせんでからに、娘の探索をして下さいと云ふのは、此は些と無理な御相談じや、其事をお話しやうと思ひながら遂今日まで機會がなかつたやうな始末じやが、私が名は實は保坂周平と申す者なので。」

「は、然うでしたか。」と自分は敢て驚く必要もなかつたが、故と目の色を滯へた。自分は此で保坂の身の上に着いて、知るだけの事を打明けやうかとも思つたが、彼が恐れて自分の手から脱れんことを慮つて、故と素知らぬ風に悦けて居たので。

「お前さんは、彼の魔酔葺の一件を御存でお在なさるか。」と、保坂は更めて聞くのであつた。

「あの靴を偷まれた一件ですか。然うじやないですか。」

(四十七)

「然う。其の靴を汽車の中で偷まれた事件じや。新聞の一つも讀まうと云ふ者は、でも知つてをる筈じやが、私はな、其事について、詳しく書記した雑報の重なるものは

大概此に持つてをる。なか／＼面白い事實なのでな。」

と彼は這度は起つて自身に靴を取りながら、裡から三四種の古新聞の切抜を取出した、看ると孰も紙は黄色く變色して、中には裂けたのもある。自分は一枚々々仔細に目を通したが、小名村の談話に泄れた詳細の事實も、此には落なく書記されて當時の事情は歴々目に浮ぶやうである。自分は文中保坂周平と云ふ名のある毎に、念はず老人の顔を見るのであつたが、老人は熱と倦いたさ、力めて自分の視線を避けるやうにと爲て居る、讀畢つて、切抜を彼に手遞すると、

「誠に明白な事實なのでな。」と再び大事さうに收込むのであつた。

「恁う讀んだ處では、如何にも明白な事實らしく見えますな。」

「私が其の被告の保坂周平である事は、お前さんも御存じや。」

「只今のお話で知つたので。」

「私は實に不幸な人間なのじや、私のやうな氣毒な人間は先づ多度は有るまい。實を言へば、今時分はお前さんと差向ひで、恁して話をしてゐる處じやない、北海道の集治監に、二度と目の目の拜めぬ身の上であるのじや。私が一身をお前さんの手裡に託

けたと云ふのは、所詮其事なのじや。」

「一身は奈何か知らんが、自由は確に私の手裏に在るので。」

「いや、一身じや、私の生命じや。私は活きてゐられやうとは思はん。雖然、今御用といふ弊が入方から掛つて、此の短銃を拿擧げられて了つても、私はまだ此に可恐しい道具を持つて居る。お前さんが若し、人一人、目前で殺さうと云ふ氣なら、部屋を出して、其邊から巡查を一人呼んで來なさるが可い。」

「決してそんな必要はないので。」

「いや、其奴は難有い。實は私は幸にして二萬許の金を持つて來てをるが。お前さんには惜くはない、失禮じやが千圓ばかりお禮に差上げたいと思ふのじや、お受け下さらんか。」と老人は思入つたる氣色であつた。

「いや、此上一圓と雖も頂戴する必要はありませぬ、頂戴しなくとも、私は極力骨を折つて見る意ですから、其の御心配は御無用に爲さい。」

「其では私は可恐しい罪人でなかつたら、お受けなさると云ふので。」

「其點もありませんが、然し眞箇金の必要はないので。」

「其ではまあ、金の話は後廻にして、お前さんは今讀んだ私の裁判、處刑に就いて、何ぞ缺點を見着けはなさらんか。」
「い、え、毫も缺點はありませぬ。私が掛の判官であつたなら、矢張り一の判決を下したらうと思ふです。」

「は、誠に直な言分ぢや。では、一點の疑もなく、私は當然其宣告に服すべきぢやと云ふので。え、其がお前さんの陪審裁判の判決なので？」

「然うです。實に明瞭な判決です。」と自分は彼を挑てるやうに、故と斷言したのである。

老人は淋しい笑方をして、

「處が検事が私の罪状について論告をした事實、即ち汽車中に起つた當時の事實と云ふものは、實は虚妄も甚だしいので。」

「虚妄ですつて。何していすな。」と自分は遠ざす切込んだ。

「具眼の人は皆然う言ひをるのじや。而して其が正しいのぢや。お前さんは、一點の疑はないと謂ふが、私は大いに疑があると言ふのぢや。」

(四十八)

「其は面白い、御説を聞きませう。」と自分は熱心に聞く爲をした。老人は目を輝かして、

「何爲かなれば、當時何の爲に天田金兵衛なるものを取調べは爲ないじやつたらう？」

「天田を喚出して、何を取調べるのです？」

「言はずと知れた盗難品に就いてじや。盗難品のうち、約束手形などは、現に天田の姓名を明記して、印が捺してあるではないか。」

「然し其は此の盜難事件とは何等の關係もない。唯の岐路の問題で、被告即ち貴方の有罪無罪を争ふ點に就いては、殆んど取調べるだけの價値はないのです。」

「處が私は、大いに此の天田金兵衛なる人物が取調べて欲しかつたのじや。」

「けれど、然うした處で、寸毫も貴方の利益にはならなかつたでせう。」

「私はお終まで、天田が召喚される事じやらうと、心待に待つてゐたのじや。處が到

頭呼んでくれは爲ん。而して私の判決が下つて了つたのじや。其時の私の失望と云ふものは、まわ何の位じやつたらう。」

「それはお察し申しますが……。」

「まあ小村さん、聞いてくんなさいまし。私の辯護人と云ふのが、内々多少か裏切をして居つたのじや。即ち天田金兵衛から賄賂を握つてあつたのじや。何と驚くではないか、然し世間は那樣事を知らうやうはない。私こそ慘を見た譯じや。」

「は、其は私には初耳です。」

「初耳とも、誰か那樣事を知つてをるものかな。何と法律も何にも、有つたものではなからうではないか。」

「尤です。して見ると、天田が其罪人なので？」

「無論じや。」

「何して貴方は天田に、然云ふ割の悪い奉公を爲せられたのです。」

「其は私よりか天田にお聞きなすつた方が、至當じやらうと思ふ。」

「貴方は天田と別戀であつたのですか。」

「別戀と云ふ譯でもないが、先づ親しい間じや。と謂つて、友達と謂ふではないのじや。恥を打明けんと、話しは解らんが、私は善く天田の屋敷へ出入をして、庭なんかを弄つて居たものじや。嘘を吐くのは、私の性分として、大嫌じやが、私は一體、若い時分には可恐い大酒喰で、兎角身持が宜しくなかつた。少しあつた財産も飲潰して了つて、一時食ふにも、困る零落やう。其後丁度妻を迎へて、其が又私には過ぎた女であつたので、是迄の行は薩張改めて了つて、一つ牛替つたやうに丁筋を入替へやうと云ふので、眞正な生業に有る算段をしたのぢや。細い事をお話すれば長い其の妻と云ふのは、色々の事情で、實に私に欺されたので、私が然うも貧乏じやと云ふ事は夢にも知らん、尤も年も彼此十四五は違つて居つたので。」と保坂老人は目をぱちぱちさせて、些と溜息を附いたが、良久あつて、

「美しい少い女房を持つて居つては、世帯の苦勞を爲せまいと云ふのが、世間の人情じや私も其弱味には勝てなかつたものと見えて、兎角濡手で粟といふやうな儲口に有つたが、けれど世の中に、那樣儲口の有らう筈はない、處でまあ、植木屋と云ふ格でもなかつたが、往々天田の庭へ入つては植木や何かの手入をしてゐるうち、根が

八々が道楽なものじやから、金兵衛夫婦のお相手をして、其道にかけては少しは異つ
ほい私の事じやから、萬更足を出すやうな無様もなかつたと云ふ譯じや。愈々悪意に
なつて、天田は悉皆私を正直な人間と見込んでからに、是非お前の力に成つて遣らう
から、其代り私の爲に、一つ遺難い爲事を頼まれてはくれまいかと云ふ秘密の相談じ
や。」

(四十九)

保坂老人は、此時床の隅に置いてあつた、ブランデーの瓶と、汽車持の金属製の小さい
蓋とを持出して、

「ブランは奈何じやね。蓋が一つしかないで、私は茶碗で飲む。」と双方へ注いで、先
づ自ら一口飲んだ。

「私はな、恚見えても腹の裡は潔白な人間じや。尤も人は困つて來ると、意にもない
悪事を働くもので、私も十が十まで潔白な事だらけじやとは言へんのじや。雖然、私
は今更、自分の悪い事は皆棚へ仕舞込んでじやな、而して天田に一切の罪を被せて

了はうと云ふ吝な了簡は持つて居らんじや、成程私も過つた。私は口を推拭つて、
知らん顔をしてをらうとは、決して思ひはせんじや。けれども私は、實際のところ
天田の好い道具に使はれたのじや。天田の踏臺に成つたのじや。而して、泡銭を懐
へ入れやうと思つたのが、抑も私が道具に使はれた基なのじや。」と彼は蓋を取擧げて
痛恨に堪へぬやうな目色をしながら、呷と飲んだ。

「或日の夕方の事じや。私が湯から歸つて、一合許の晩酌を飲つて陶然と好い心持に
御神酒つて居るてえと飄然と天田金兵衛さんが遣つて來た。」

「は、。」と自分は一口ブランを嘗めながら、相手の顔を覗めた。

「其晩は、何か取わけお世辭が好くて、妻が何時も垢の着いた者を被て、煙つてゐる
のが氣毒じやと言つてからに、紙入から折目の着かぬ五圓札を一枚取出して、半襟の
一掛、下駄の一足も買つて穿いてくれると云ふ話じや、其では恐入るからと云ふので
連と辭退をしてゐるてえと、否、實は今夜は少し頼みたい事も有るからと云ふのでな
私が御用ならば何でも致しませう、お禮は又後にと推戻しても、なか／＼肯入れさう
にもない、其處で先づ用事を聞くと云ふと、恚なのじや。」

と老人は自分の顔を腫めて、聲を潜めて
 「實は今日大な詐欺に會つたので、其曲者は二人組じやが、名々別の方角へ失せたと云ふのじや。一人は多分東京に居る見込じやが、一人は確に新橋から關西の方へ逃げに相違ない、後で寛り話は爲るが、何しろ新橋から汽車に乗るのは確じやから。一つ追駈けて、近いて口を利いて、様子を探つてはくれまいか、無論、何も難しい事はないので、其方法は、先づ横濱か、横濱手前の神奈川邊までの上等切符を買つて、汽車に乗込む。何でも七時の急行に乗るのは確なのじやから、其に間に合ふやうにさへ急いでくれれば可いと云ふので、人相から年恰好、着物から穿物まで、悉しく教へてくれたのじや、其で首尾よく見着かつたら、精々調子よく話を持掛けて、貰なぞを興れて遣る、向は商人じやから、無論外らさんやうに詰答をするに決つてをる、貰も並のでは可けんから、私が此に近頃新流行の無類飛切と云ふ上等品を持つてをるから餘計は要らん、二本も用意をして、お前も一本は吸ふが可い。若し上等に乗らなければ中等、下等と云ふ事は無論無いが、外に乗客がなければ、其に越したことはないので宜しく戸を締切つて二人で一兩占めなければ妙でない、向の様子を探つて、是から京

都へ行くとか、或は名古屋へ行くとか、其とも神奈川邊に彷徨くやうな素振が見えるとか、大概其位の事が解つたら、直ぐ下車して引返して宜しいと、用事はさつと遠慮處で、其の貰を二本與れたのじや。聞いて見れば造作のない話じや。其で首尾好く此詐欺が捕れば、うんと褒美を與れると云ふではないか。私は二つ返辭で引受けたのじや。私は其から車を飛して新橋へ飛すてえと、丁度速好くか、速悪くか知らんが、寸法通り其男に打衝つたのじや。

(五十)

「私は早速切符を買つて、其男の後から一等へ乗込んだ。些と風采の好い男で、身装も立派な紳士じや。私は取敢へず戸を締切つて了うて、其傍に座を占めたのじや。幸と誰も入つて来るものはない。間もなく發車と云ふ事に成る、初發は先づ一口二口、孰も遠慮勝じや。ステーションを一つ二つ越して丁度頃には、段々親しくなつて、色々話をする。向はなか／＼如才のない男で、話の調子も好い到頭其の話になつて、此は近頃稀らしい甘い貰で、今人から貰つたばかりだが、一本奈何です、と云つた

やうな工合じや、尤も向は葡萄酒なんか提込んで、私にも授けてくれたので。處が私
 は不斷からして、餘り貰の行けん方じや、三分の一も吸はないうちに、妙な氣持に成
 つて来た、貰は至極柔かい、莫迦に好い香氣のある品で、其故不好でない私も、遂喫
 うたのじやが、相手は又非常な喫煙家と見えて、私が三分の一も喫うた時分に、もう
 半分の餘も灰にして丁うた。するうち、私は好い心持に眠りかけた。此奴は變じやわ
 いと、思うただ、何しろ心持が莫迦に好い。汽車が確か神奈川手前のステーションで
 停つた時(今考へて見ると、那の汽車は急行ではなかつたやうじや) 突然に
 一人の男が戸を排けて、入つて来た。其男は何か黒いものづくめの打份で、烏打帽子
 を冠つて、襟捲でも捲つけてゐたものか、何も顔も解らず、其に私の目も餘程ちらつ
 いては居つたし、頭も何かぼんやりして居つたので、其儘寝入つて丁うた。汽車
 の動き出したのも覺えん位じや、旋て神奈川へ着いた時不圖目が覺めたので、惶て、
 飛出さうとしたが、未だ何も頭がぐらぐらして居る、相手の男に挨拶をしやうと思ふ
 と、其男はぐつすり寝込んで丁うて、からもう意氣地がない、先刻入つて来た男はと
 思つて贖したけれど、其も居らん。するうち汽車が又動出しさうになる。泡を喰つ

て飛出して罎の外へ出て、多時茫然してゐるうち、何か速に懐が重い、變じやと思
 うて、手を突込んで見ると、さあ不思議、懐に在るのは罎革の大形の紙入やう
 の品じや、靴を偷んだやうに書いてある新聞もあり、中には中味を抜いて、靴を途中
 に棄て、あつたなど、云ふのは、皆嘘じや。實は其紙入が懐にあつたので、入れた
 覺がないので、青くなつて丁うた。可怕々ながら秘と中を開けて見ると、何か
 サツクやうのものに書類、金はなかつた。早速駈着けて警察へ訴へやうかとも思つた
 のじやあつたが、然うしては又どんな迷惑に成らんとも限らぬと、其處が私の愚なと
 ころで、何かは知らず、無上に氣味が惡うて耐らんじや。加之、這處品が知らぬ間
 に懐へ入つてゐたなど、筋道の解らん事を訴へ出たところで、然うかと言つて受
 領する筈もなし、勢ひ面倒を惹起さすには濟まんとか考へたものじやから、左に右天田
 へ歸つて、相談をしてからの事と、休み茶屋で一服喫してゐるうち、二十五分経つて
 汽車が丁度来たから、其に乗つて東京へ歸つた。其途中で私は捕まつたので、總ての
 事が、丁と私を罪に擠すやうな鹽梅式に仕組れてあつたのじや。私も一體が、間拔じ
 やが、恠う陥罪が綿密に出来てをつた日には、迎も脱れられん運命なのじや。」と老人

やうな工合じや、尤も向は葡萄酒なんか提込んで、私にも提つてくれたので。處が私
 は不敵からして、餘り其の行けん方じや、三分の一も吸はないうちに、妙な氣持に成
 つて来た、其は至極柔かい、莫迦に好い香氣のある品で、其故不好でない私も、遂喫
 うたのじやが、相手は又非常な喫煙家と見えて、私が三分の一も喫うた時分に、もう
 半分の餘も灰にして丁うた。するうち、私は好い心持に眠りかけた。此奴は變じやわ
 いと、思うた、何しろ心持が莫迦に好い。汽車が確か神奈川手前のスターションで
 停つた時（今考へて見ると、その汽車は急行ではなかつたやうじや）突然に
 一人の男が戸を排けて、入つて来た。其男は何か黒いものづくめの打份で、烏打帽子
 を冠つて、襟捲でも捲つてゐたものか、何も顔も解らず、其に私の目も餘程ちらつ
 いては居つたし、頭も何かぼんやりして居つたので、其儘寝入つて了うた。汽車
 の動き出したのも覺えん位じや、旋て神奈川へ着いた時不圖目が覺めたので、惶て、
 飛出さうとしたが、未だ何も頭かぐらぐらして居る、相手の男に挨拶をしやうと思ふ
 と、其男はぐつすり寝込んで了うて、からもう意氣地がない、先刻入つて来た男はと
 思つて噴したけれど、其も居らん。するうち汽車が又動出しさうになる。泡を喰つ

て飛出して罅の外へ出て、多時茫然してゐるうち、何か速に懐が重い、變じやと思
 うて、手を突込んで見ると、さあ不思議、懐に在るのは鶴革の大形の紙入やう
 の品じや、靴を偷んだやうに書いてある新聞もあり、中には中味を抜いて、靴を途中
 に棄て、あつたなど、云ふのは、皆嘘じや。實は其紙入が懐にあつたので、入れた
 覺がないので、青くなつて了うた。可怕々ながら秘と中を開けて見ると、何か
 サツクやうのものに書類、金はなかつた。早速取寄けて警察へ訴へやうかとも思つた
 のじやあつたが、然うしては又どんな迷惑に成らんとも限らぬと、其處が私の愚なと
 ころで、何かは知らず、無上に氣味が悪うて耐らんじや。加之、這座品が知らぬ間
 に懐へ入つてゐたなど、筋道の解らん事を訴へ出たところで、然うかと言つて受
 領する筈もなし、勢ひ面倒を惹起さすには濟まんと考へたものじやから、左に右天田
 へ歸つて、相談をしてからの事と、休み茶屋で一服喫してゐるうち、二十五分経つて
 汽車が丁度来たから、其に乗つて東京へ歸つた。其途中で私は捕まつたので、總ての
 事が、丁と私を罪に擠すやうな鹽梅式に仕組れてあつたのじや。私も一體が、間拔じ
 やが、恠う陥罪が綿密に出来てをうた日には、逆も脱れられん運命なのじや。」と老人

は長々と辯じて、又プランを注ぐのであつた。
「其で詳しく解つたです。其の不意に入つて来た男の春恰好は甚慮でした。」
「其が薩張覺えがないのじや。私は其から未決に居つたが、何も心外でならん。のみならず、它には其日の煙も立難ねて、妻が甚慮に心配をしてゐる事かと、其が又何とも言へん苦勞じや。」

(五十一)

「其でな、」と保坂老人は更に話を續けて、「私は自分の不幸よりか、留守をしてをる妻の身の上が氣に掛つてならぬところ、逢ひに来てくれる男があつた。其は取も直さず天田金兵衛さんで、誠に氣毒じやあるが、何も災難なら爲方がない。宅にゐる女房の事が氣掛なら私に何にかしてやらうから、決して心配するな、と言つてな、私が其の事を話したら、ああ、其は未だお前が良い寛を喫つた事がないから酔つたのじや、大方強過ぎた所爲でもあらう。其の途中で突然入つて来て、何時の間にか出て行つて了うたと云ふ男、それが何も疑しい。何う考へても、紙入をお前の懐へ捻込んだの

ば、其男じや。と、まお徳云ふ話じや。其處で私が、奈何したらば宜しいかと聞いた處、お前は當分奈何、爲様がない、私は無論お前が偷んだとは思はんが、何しろ懐へ入つてゐた以上、嫌疑を受けるのは當然の事じや、致方もない。が、私は此から、東京での名高い辯護士を二人ばかり備うて、十分お前の爲に辯護を爲せて見る。のみならず、金目を惜まらず、二つ其不意に入つて来たと云ふ、眞實の泥坊を探索して見やう、其本人さへ捕まつて了へば、同時にお前の體も青天白日、無罪放免じや。萬葉をれを待つて居てくれと、親切な心添じや。私も其恩誼に感じて其では何事も宜しきやうにと、手を合して拜まぬばかりに禮を言うて別れたが、果して妻からも手紙が来て金を天田に貰つたと云ふやうな話で、私は唯もう、天田の親切が身に滲みて居るばかりじや、其も其管で、私の潔白を知つて、心から氣毒と思つてくれるのは唯天田一人と、一圓に憐れ思込んで居つたのじや。」と老人は其から監獄に苦役中の話から脱獄の顛末、妻と娘とに關する音信を聞いた話、落もなく物語るのであつたか、其は悉く自分が小名村から聞いた話と符合するのであつた。
「先づ私は大體徳云ふ身の上じや。何と思つて下さるな。」

「私は貴方の無罪を認めると同時に、非常にお氣毒に思ふ。」
「其でお前さんも私が、私立の探偵社へ一旦は託したが、直に約束を釋いた理由もお解りに成るじやらう、所詮捨もつ身の上じやから、迂かり探偵に尾けられてはと云ふ掛念からじや。」

「然し、貴方小名村を怖るゝには當らんでせう。」

「小名村？ではお前さんは、小名村を御存でお在なさるか。」と保坂は目を圓くした。

「小名村は、もう極親しい私の友人であるので。」

「其奴は取んだ……。」と老人は顔を翳めて腕を拱いた。

「いや、決して心配する事はないので、小名村は然云ふ不安心な人間ではない。」

「でも、薄々私の身の上を勘づいて居りはせんか。」

「其は或は知つてをるかも知解らんが、其邊は私が丁と口留をして置いたので、現在此方へ抱込んで、共々此事件の爲に盡力させる事に成つてをるから、少しも憂ふるには足らん。」

「けれども、那云ふ人間は金次第で動くのじや。」

「大丈夫、私に信頼してお在なさい。其處で貴方の尋ねる娘さんと云ふのは、今何歳に成るので。」

「然やう、確か十七。」

「容貌と謂つても、御存じないのだが、其阿母さん、即ち亡つた貴方の細君は、何云ふ風の女でしたね。」

「私の妻かな。妻の寫眞が一枚此に在るが、此は他が十六の折の寫眞じや。」と彼は又鞆を引寄せて、底の方から紙に包んだ一枚の古寫眞を取出した。

(五十二)

寫眞を取つて見ると、痛く褪色はしてゐるが、猶其の美人たる事は明かである。一口に言へば可憐の少女で、目の清しい口の約やかな、孰かと言ふと沈んだ顔の、極めて柔和な相である。

「此が貴女の妻君。非常に順しうな顔ですね。」

「先づ順しい方だな。勿論顔も美しかつたが、然し其の性質の順しかつたのが、何よ

り取柄じや。」

「目は何云ふやうな色でしたな。」

「然やう。黒眼勝の、少し碧味が、つた、誠に、奇麗な目であつたので。」

「脊は何ですな。」

「脊は方い高じやなかつたが、低いとも謂へん。色か真白で、髪が莫逆に濃かつた。大體に於て、靴子と克く背て居ると、自分は獨り領きながら、細君には御親戚が有りましたかね。」

「妹が一人居つたが、此も皆暮行方が知れんので。」

「保坂さん、其では今日にも一つ、娘さんの探索に出かけませうか。」

「娘の探索に？」

「は、些と心當があるのです。然しまわお待なさい。貴方は結婚後、間もなく死骸をしたのだが、何です、其間に、若し二人の間に子が産れたら、何云ふ名を命けるとか云ふやうな話は無かつたですか。」

「其は有る。妻は何しる年が少いので、其處らの考もなかつたやうじやが、私は曉

い婚禮であつたから、迅く子供が一人欲しいものじやと、始終其を言詰にしてをつたが、若し男の子なら、私が名を命じやうが、女であつたら妻が名を命けるやうに、と云つた事があるやうな覺もあるのじや。」

「其妹と云ふのは、何云ふ人でした。」

「然やう、何か餘り質の善くない方じやと云ふことで、悉し其ことは知らんじや。」

「して見ると、愈よ疑はない。」

「疑はないと言ひなさるのは、彌張何か其の娘の事か？」

「然うです。其姓を聞いておけば可かつたですが、末だ其を聞く隙はなかつたので。

柴垣に會ひさへすれば、譯はないのだが、此の際の事ではあり……。」と自分が口をこらしたのを、老人は逸早く聞答めて、

「其じや何か、柴垣さんが御存じでもありますので？」

「いや、其は追つてお話をするが、多分其御婦人だらうと思ふです。」

「然うですか、其奴は何もして、何處に居りますか。」

「那裏は、然やう、赤坂ですか。然し其が果して貴方の娘さんであるか無いかは此

で確言は出来ん。」

「其は無論然うじや。何うか其が娘であつてくれ、ば好いが。名は何と謂ひますな。」

「鞠子さんと云ふのです。」

「何云ふ處に住つてをりますす。」

「まわ、行つて御覽なさい。先づ幸福に暮して居られるのです。」

「幸福に！ いや、私も其を聞いて頓と安心しました。やれ、十八年振で……いや、初めて會ふのじや。私が妻を娶つた時分の妻の齡が丁度今の娘の年頃、今でも其の娘々した姿が目に着いて、死んだやうには思はんのじやが、何か其の妻と間違ひさうなお話じや、そして何なんですか、何處ぞ人のお世話にでも成つてをりますので？」

「然やうまわ、然謂つたやうな譯ですが、此が貴方のお尋ねなされる娘さんで無つたら嘘、失望するでせうな。」

「は、何か實の娘であつてくれ、ば可いが。其では大變御苦勞で相濟まん譯じやがお差圖がなかつたら是非一つな。」と保坂老人は急に元氣づいて、身支度に掛るのであ

つた。

(五十三)

俣を騙つて、青山へ着いたのが、彼此八時の頃で、午後から滄つて来た天氣は、動もすると雨を催しさうな空合、雲所々に淡墨を刷いて、ぼつ／＼星の幽な輝き、風は何となく重苦しくて、極めて不愉快な晩であつた。道が悪いで、原で俣を棄て、二人は話しながら行いた。

「いや、然し險難な譯じや。此間小名村に別れてからと云ふもの、妙に怯氣が着いて何じやか憐う、那の男が後を追懸けさうな氣が爲て堪らん。こんな思をして、警察の行達いた此東京なんぞへ来る事もないのじやが、子に引さるゝ親心は又格別なものじや。私は一ト目娘に逢うて、十年來骨身を碎いて溜めた資産を譲つて、嬉しく父子の對面が出来れば、其で何にも思遺す事は無いのじや。歸に此の原の真中で、御用の聲が掛つたとて、更に可憐いとも思はんのじや。」

「然うでせうな。私など妻もなければ、子もないものには到底解らない味があるの

でせうな、然し其が實際娘さんであつてくれ、ば可いが、間違だとすると、私が大變極の悪い人になる。」

など語りつゝ、うろ覚えの道を辿つて、旋て例の門の前へ来た。自分は急に立停つて、「然し保坂さん、突然に貴下を連れて入つたら、鞠子さんも定めし驚くでせうから、一應私が事情を話してから御紹介する事にしては奈何ですな。」

「然やう。では然云ふことに願ひまするじや。」

「此頃一身上の事で、非常な心配がある矢先なのだから、成べく穩かにした方が可からうと思ふです。」

「何分宜しくな。」

自分は保坂老人を門前に立たせておいて、獨り裏へ入つた、落葉のかさこそと背する徑を辿つて、旋て其格子先まで前んだが、裏は寂として更に人氣がない。が、灯影は幽庭の方へ泄れてゐる。格子戸を啓けて案内を請ふと、例の婆さんの聲が奥から答へて、旋てランプを持つて立現れる。何か心配さうな、心細さうな顔色で、慄々と自分の顔を見上げたが、

私は柴垣の友人、此間お邪魔をしました小村です。鞠子さんはお宅ですか。」

「はい、然やうでございしたか。お見外れ申して誠に失禮を。萬望少々お待ちなすつて下さいまし。お嬢さんは少し氣分が悪くて、一昨々日あたりから、お寝つて在しやるのでございまして、はゞ。」

「其は可けませんな、餘程お悪いですか。」

「はい、いゝえ、大した事でもないやうでございしますが……。」

「唯今はお目覺ですか。」

「はい、今し難漸く慣々と……。」

聲が聞えたのか、奥から婆さんを呼ぶ、鞠子の弱い聲が聞える。婆さんは些と奥の方へ引込んだが、直に出て来て、

「取亂してをりまして、誠に失禮でございしますが、お宜しければ萬望お上り下さいませすやうにと、然う有仰るのでございしますが。」

「然うですか。ではお目に掛りませう。」と自分は上つた。只看ると、鞠子は南を枕に薬瓶やら葉やら、小説新聞など取散して臥つてゐたのが、今起上つて、寝衣の上は

派手な柄の絲織の書生羽織を羽織らうとしてゐる處で、自分の姿を見ると急いで襟を掻合して、布圍を退出やうとする。

「どうか其儘に。御病氣の處、無理を爲すつちや可けません。」

「いゝえ、もう大した事でもないのをごさいます。見苦しい處、大變失禮でござりますすけれど、御免蒙りまして。」

「而して御病氣は何です。」

「はい、彌張風邪か何かなのでございませうけれど……。」と鞠子は端然と席を正して、丁寧な挨拶に取掛る。

(五十四)

「實は。」と自分の茶の冷めた頃徐ろに切出した。貴女に是非、お目にかゝりたいと思ふ人があるので、其人を連れて参つたのです。」

「私にでございますか。其は又、何云ふ方なのでございます。」

「實に不思議な人が来たのです。」

「不思議な人！へえ。」と鞠子は目をくるく／＼させて、自分の顔を見入つたが、

「では何でせう屹度柴垣さんなのでございませう。私をお押揃ひなすつて。え、屹度然うでせう。」

「柴垣ではないです、實は久しい以前遠くへ、参つてをつた人で、娘が一人東京に居るのを尋ねて来たのですが、話の様子を聞くと、何も其が貴女らしい。間違つたらば幾重にも御詫をしますが、左に右會つて御覽なさい。」

「まゐ何と云ふ。」と鞠子は低聲に呟いたさきり、夢を見たやうな目を睨つて居た。

「此方へ通しても可いのですか。」

「はあ、」と力ない聲で言つたが、「だけれども、眞實の父なので御座いませうか。」

「さあ、其は確と請合ふ事は出来ませんが、」

と自分は漸く思出して、「貴女の御苗字は何と云ひます。」

「保坂、父は確か周平……。」

「保坂周平、此は不思議だ。正に御父さんに違ない。」

「え、父ですつて、其人の名が保坂ですつて。え、眞實ですか。何處に居るので御

座います。「と清しい目を耀かしたが、猶其底に一點疑懼の色があつた。
「まわお待ちさい。」と自分は起つて、突然外へ飛出した。
保坂老人はと見ると彼は門の側に跪坐んで身を縮めて居たが、此時ひよろりと起上つて近いて来る。

「保坂さん、お悦びなさい。貴方の娘さんに逢ないです。」

「何、私の娘に……む、其奴は何も」と聲を顔したが、漸く氣を鎮めて、「入つても差問ありませんかな。」

「無いですとも。」

「私は何も眞實とは思へば爲ん。」

旋て奥へ通りうとすると、迎に出かけた鞠子と出會頭に、双方暫くはうろくして居たが、暗黙の裡に座が定つた處で、

「此が貴方のお尋ねさる鞠子さんです。」

「然うですかい。いや、何か怪う夢を見たやうで、頓と口も利けん始末……」と保坂老人は、杖から杖を撈り出す。

「貴方が御父様でございますか、」と鞠子も顔聲である。

「私が保坂周平と云ふ……」と漸く言差して熟々と鞠子の顔を見て居たが、

「成程、争はれぬものは血筋じや。死んだ妻……照に酷肖じや。」

「私、あのう、何から申したら可いのやら。」

「私はお前の父に相違ないのじや、鞠……お前の名は鞠子と云ふはうじやが……能くまの達者で大きく成つてくれたな。」とはらりと涙を分す。

「御父さまも、お丈夫でお愛でたうございます。」と此も坐合涙んだる聲。

「やあ餘まりお愛でたくもないがのう、お前には重々濟まんじやつた。」

「いゝえ、私こそ。」

「善くまお顔を見せてくれ。娘に逢ふのだから、妻に逢ふのだから、私はもう胸が一杯に成つて悲しいとも嬉しいとも、何とも言様がないのじや。」

「眞實に善く来て下さいましたね。私も何ですか……」と涙の顔を背向ける、自分も二人の此圖に對しては、念はず涙を遏め得なかつた。

(五十五)

「私もお二人のお喜びを見て、這麼愉快な事は有りません。」と云ふと保坂老人は、
「此も皆小村さんのお蔭じや。私が小村さんに會はなければ、お前に會ふ因縁もなかつたらうし、小村さんがお前を知つてお在でなければ、私を連れて下さる事も成らん
のじや、鞠や、能く小村さんにお禮を申しあげてな。」

「小村さん、誠に御蔭様で、私は思がけなく御父様にお目に掛れたのでございます。」
「其にしても、小村さんとは何時かのお腕じや、何か其の、平生からお世話に成つてをるのかのう。」

「はい、此頃私の身の上の事に就きまして、色々御心配下さいまして。」

「それは。而して何時頃からじや」との尋、自分は引取つて、大略柴垣との關係を話し、更に進んで柴垣が昨今の窮境を説いた。老人は一々頷いて、熱と耳を澄して居たが、良久おつて、

「實はな、柴垣男爵が天田の娘と結婚を爲さると云ふ事は、小名村から上京當時に、

薄々聞いたのじや、何も其が柴垣さんの爲に非常に不利な事じや。と謂ふものは、先刻もお話を爲たやうな工合で、金は満と持つてをるかなれど、其が皆不義の富じや。私
は頭から此の御結婚は不賛成なので、何も人の疝氣を頭痛に病むことはないやうな
もの、柴垣さんとも謂はるゝ方が、那のやうな悪黨と、何も知らずに縁組を爲さるゝ
のがお氣毒さに、旁々實は貴方にお配近に成つた次第じや。」

「其では何ですか、御父さんは柴垣さんの御縁組先を御存で在しやるのでございますか。」

と鞠子は、遠しく聞いた。

「知つてをるところか、實は御父さんの敵なのじや。私を可恐しい罪へ投込んだのは
其縁組先の天田金兵衛と云ふ悪者じや。お前を孤兒に爲たのも彼奴、二十年弱と云ふ
ものお前と私と、死んだか活きたかも解らず、懸隔たつてゐたのも、彌張彼奴のお蔭
じや。」

「へえ、そお那樣悪い方なでございますか。ですけれどね御父さん、私は柴垣さん
に大變御厄介に成つたんですけれど、這度柴垣さんの御都合で、今小村さんがお話し

なすつた通り、其の春江さんと云ふ方をお貰ひなさるんでございますからね、萬一
 悪く有仰らないで下さいましよ。」
 「何有、私が何で好んで人の悪口を吐くもか。其れと言ふのも、柴垣さんの不利益に
 成る事と思ふからじや。」

「ですけれどね、其御父さまはお悪い方でも、春江さんは臆度優しいお方なんでござ
 いませうから」と鞠子はほろりとする。

「じう、其は大に然うじや。雖然、天田と云ふ人物は、何ぞ好い死様の出来ん人間じ
 や。私が面の皮を引剥すとも、晩かれ早かれ化の皮を現さずには居らん人間じや。す
 れば縁に繋がる柴垣さんとても、世間からは好くは言はれせん道理じや。私は此の
 結婚は大不賛成じや。」

「其は不賛成です。私とても、決して賛成は爲て爲ないので、と自分は宥めるやう
 に言つて、

「其ですから、私は非常に心配をしてをるのです。柴垣の負債は彼是、凡そ一萬弱
 も有りませうか。其うち焦眉の急に迫つて居るのが僅四五千圓、其金さへ有れば、何

も天田輩の娘と結婚する必要はないのです。處が、那なつては、其金の工面すら難し
 い、一體が小心な、神経性の男で、あの困難な財政を背負つてゐては非常な墮落をし
 なければ、發狂でも爲かねない方です。私は實に氣毒で堪らない。と謂つて、私の
 微力では、之を救ふと云ふ譯にも參らるので、まあ、此問題を奈何解決したら可いか
 と、非常な心配をして居るのです。」

「むう、大にな。」と聞畢つた老人は、熱と拱いて居た其腕を緊く締めて、首を傾げた
 のであつた。

(五十六)

話が急に途絶えると、部屋は忽ち森として了ふ。外では較吹増る夜嵐、横手の林には
 かざこそと枯葉の梢が揉合ふ音と思ふと遠く雨脚の絶ゆるが如く彼方に消えて、此は
 早や山里の冬と言ひさうな佻しさである。自分は倦き、老父は首を捻り、而して鞠子
 は覆れた其面、横からランプの光を浴びて、素毛の懸つた後頬の微紅う、動もすると
 水晶と擬ふ涙の顆が、全て透通るやうな其目に凝つたやう。

此時まで、外へ出たり、臺所へ入つたりして居た婆さんは、忽ち膳部を連れて来たが、部屋の間へ手を支いて、

「彼方でお聞き申せば、此のお方が鞠子さんの御父さまなんぞでございますつてね。」

何と云ふ、まのお愛でたい。嗚お嬉しく在しやいませう。」

「あゝ、お婆さん私何だか夢を見たやうよ。」

「然よで在やいませうとも。私も願と。」

「いや、娘が色々御厄介で……。」と老人も更めて挨拶をする。

「此お婆さんは、大屋のお年寄なんですから、毎もお世話にばかり成つて、大層御親切にして下さるのでござります。」と言ふうち、婆さんは膳を据ゑ下つて、懇懇に酌を為ながら、

「是からはもう鞠子さんは、薄命だくと、毎もの口癖を有仰る事も御座いませぬよ。眞實にね、時節は待つべきもので御座いますよ。さあ鞠子さん、貴女もお一つお持なさいまし、ね。」と猪口を差出す。

「私不調法よ。」と頭を掉る。

「でも今日はお愛でたいのですから、ね、是非、一口。然う為さいよ。」と猪口に七分目ほど注いで、

「這麼邊鄙なものですから、何を拵へるにも急の間には合ひませんので、唯本のお祝だけに。」

「いや、なか／＼結構で、と老人は猪口を自分に差すのであつた。

「まお此は鞠子さんに。」

「然うじや、其ではな」と娘に差しながら、

「お前さんが然う喜んで下さると、私は尙更何か面目ないやうな心持でな。」

「いゝえ貴方、能うこそ来てお上げなすつて下さいました。」

「二十年弱も、現在の子を放抛つておいてからは、其所在も知らんと云ふやうな、まわ他人が聞きなすつたら、定めし不人情な親じやとお思ひじやうが、其處には又色色仔細があつてな、然し生命があれば慈して愛でたく會へも爲たといふものじや。」

「然よでございませすとも。萬望、此から可愛がつてお上げなすつて下さいまし。何が何だと申しても、親子ぐらゐ可憐いものはございせんすよ。其に鞠子さんは、人

一倍氣立がお優しくつて在やるものでございませうから、始終御父さんお阿母さんの事はつかり、言出しちやね、私の御父さんは無いのか知らなんてね。」

「而して何か、病氣は大したことでないか。」

「は、もう可いんです。」

「今夜はまあ、此方にお泊りなすつて、寛りお話しなさいまし。」

「孰れ御厄介を願はんければ成らんが、」と老人は今鞆子が還した猪口を、一口飲んで然も満足さうな面持で、

「私も此二十年、彼方此方放浪の身の上で、謂はゞ無宿じや。其が思ひがけん、道塵安心な娘の宅に落着いて、皆さん方と想う一緒に酒を飲じ、其の愉快は、まわ何のくらゐか解らんじや。なわ小村さん、娘も不幸じやが私も世の中の薄命兒じや。妻には死ね、娘の顔は見られず、尤も金は少しは溜めたけれど、懐が暖かくなれば爲るほど、何となく世の中が寂しい、心細い。冷たい。私は何處へ行つても、何か寒い野原を一人で、とぼく行いて居るやうな氣持で、一杯の酒も美いと思つて、飲んだのは途ぞ無いのじや。」

(五十七)

「然うでしたらうな。」と自分は猪口を干して差しながら、「一つ健康を祝ひませう。」

「難有い。」と老人は些と押戴いて、「處が、今夜は其の私が、娘の側で居て心持よく酒が飲まれる、實に無上の愉快じや、世の中は何か、私を苛めやう、突休さう、縛らう、撲たうとしてゐる連中ばかりのやうに思つて居つたのが、遣度は皆さんの御親切で地獄に佛とは此事じや。」

「眞箇でございませぬ。」と婆さんが感心して居る。

「其に就けても、小村さんの御盡方は又格別じやが、私は柴垣さんに大層御恩に成つてをるのじやから、是非此頃に出會つて、色々禮を述べたいと思ふが、別段差問はなからうな。」

「有りませぬ。」

「其で此は、小村さんへの相談じやが、今日に見えてゐる柴垣さんの困難、私は此の理合に其が一つ救つて見たいと思ふのじやが何ありませうか。」

「むい、然うですか。其は至極可いせう。」
 「いや、生返辭では困るのじや。私も真人間の體なり」と保坂老人は急に調子を落して、「なわ、情ない事には不都合な身の上じや。金は取て天田のやうな汚い金ではない、自分の汗で自分が儲けた金じやが、扱何うもな、殘念な事は日蔭の體じや。」
 「では何ですか、貴方は柴垣に金を用達てると云ふので。」
 「所詮然うじや。」

「其は非常に結構ですが、貴方が汗水垂して然云ふ逆境に在りながら、辛い念をして漸く貯へた金を、柴垣とて一箇の紳士である以上、其は難有いと謂つてお受をする所由はないでせう。」
 「むい、其は私の金などは、可厭じやらう。受取はなさらんじやらう。けれども、私は過つて這座體には成つてをるが、精神は潔白なものじや。金も潔白な物じや、天田のらのは少しは違ふ意じや」と語氣が激して來る。

「さや、然う取られては困る。金は無論神聖の品、貴方の心持も十分知つてをるです。」

「では、受けられんと云な法はあゝあるまい。お話に依れば、運慶者の娘でも、不憚と思つて引取つてやらうとまで謂はれた鞠じやから、私は成らう事なら、天田の縁組を打壞して、面當にでも娘を差上げたいのじやが、其は些と厚がまし過ぎる、第一身分が違ふ。のみならず外聞にも係る。金ならば、差上げると云つては失禮じやけれど、一時御用達をしても然まで柴垣さんの顔に係ることも無からうかと思ふが、何じやね。」と老人は熱心に説くのであつた。

「大きに感謝する處ですが、一應柴垣の意中を聞いて見ん以上、私一存で何とも御返辭の爲やうがないのです。」

「其は勿論、篤と柴垣さんと御相談の上でなければ可かんのじや、其でじやね、私は最う一つ、金よりも大切な品を所持して居るので、此は他日の證據にも成る大切な品、餘人には決して見せん品じやが、お前さんには差岡がない、私の冤罪はお前さんも御承知の通りじや、私は今更此の冤罪を雪がうとは思はん、雪ぎたくは思つても、其を訴出た日には、更に殺人や脱獄の罪で、一生目の目の拜めぬ體に成つて了はんければならん。夫故、此で天田の悪計を暴き出すのは、まわ休にして、切めて天田の心に苦み

を與へてなりと、此の怨が晴したいと思つて、此間些と天田の壯肝を抜いておいた始末じや、他でもないが、天田が悪計の證據物件とも爲る品で、取も直さず私が汽車の中で、懐に入れられた紙入と一緒に、天田が抜いて行つて黒真珠が其で、今更世間へ賣出しもならず、棄てもならず、可怕吃驚で仕舞つてあつた處を、私が湯と取つて來たのじや。」

「貴方が其じや………」

「は、驚くことは有りませんのじや。」

(五十八)

保坂老人は落着拂つて、「私は何も黒真珠が失せたと、天田が能う訴へて出んのを知つて取つた譯ではない。今でも天田に會へば、私は彼日の盜賊じやと公言するだけの覺悟を持つてをるので、又真珠が私の手に在るのを知してやりたい位のものじや。天田は胸がどきどきして居るに相違ない。悪い事は爲ぬものと後悔して居るに相違ない、既に好い氣味でならんのじや。然し、あの黒真珠は私は持つてゐたくはない。若し那品

を提げて行つて、天田に面會して、之を買つてはくれまいかと謂へば、其處相談でも纏まらんと云ふことはあるまい。一萬圓でも安いものじや。他を買つて了へば、天田は枕を高くして眠れるのじや。其じやな小村さん。」と老人は又猪口を差して、

「若し私の金を受取れんと云ふ事なら、那の黒真珠を受取つて貰うては奈何じやらうか。」

「然し、其を買つた處で、我々にも爲方がありますまいな。」

「不用とあらば致方もない事じやが、萬更役に立たん事もあるまい。」

「其は無論、現に私に賞を懸けて搜してをると云ふ話ですから、買ふには相違ない、然し何しろ盗品ですから。」

「盗品じや、其を賣らうと云ふのは、如何にも人の悪い爲方じや、然し私は、此品を天田の前に突着けて、彼奴の吃驚して蒼くなる處が見てやりたくて堪らんのじや。強ち金を取つてやれとは言はん。」

「其は愉快でない事は無い。十分脂を取つてやつて然るべきだ。」

「何じやね、一つ其の脂を取つて遣つては、然しておけば、私も二十年來の飽飲が下